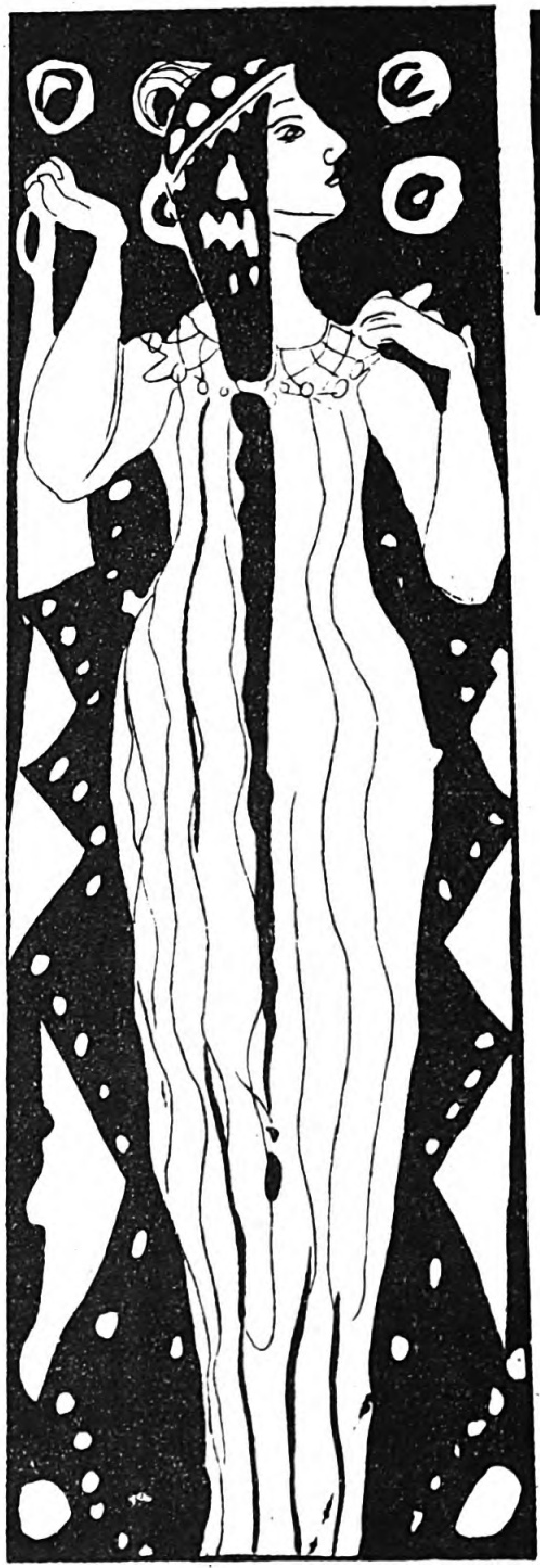
# 青鞜



第七月號

明治四十四年八月二十八日第三種郵便物認可 第七號

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

# 青鞜第二巻第七號目次


叔父ワーニヤ（脚本）……一……瀬沼夏葉譯

モルヒネと味噌（脚本）……四……上田君

わが身（短歌）……三五……三ケ島よし

習作の四（小說）……三八……杉本正生

或る夜（小說）……四三……小笠原貞

樹下闇（俳句）……五四……白雨

ルーチンを弔ふ……五六……上野葉

帝國劇場の六月女優劇を見る……六七……紅吉

仙女島（散文詩）……八五……ポオ

圓窓より（評論）……九三……らいてう

祭（日記）……一〇四……歌津

「あれさま」と「うちわ繪」……一〇七……紅吉

編輯室より……一一〇……同人

# 青鞜

第二巻第七號

Digitized by Google

Original from
UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

Digitized by Google

Original from
UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

## 第三幕

### 二

ヲイニツキイ。(花束を机の上に置き、息をはずませながら、手巾にて顔を拭き、又頸を拭ふ。) なあに……うむ……なあに。

アストロフ。(しら〳〵しく)や、今日は、イワン・ペトロヰチ君。天氣が好いですなあ、朝の中は曇つて何だか雨でも降つて來さうでしたが、好い鹽梅に日があたつて來ました、秋時は好でせう。(地圖をくる〳〵と巻く。) 然し日が奈何も短かくなつて來てね、……(退場)

エレナ・アンドレエウナ。(急いでヲイニツキイの傍により)。貴方どうか私に助けて下さい、今日私夫と一所に此所から立ちますやうにして下さい。どうぞね、可うござんすか、能度今日中に。

ヲイニツキイ。(顔を拭きながら)。はあ? あゝ、さうですか……可しい……我輩はヘレン皆見ました、皆すつかり……

エレナ・アンドレエウナ。(神經的に) お解りですか? 奈何しても今日中に此所から立たなければなりませ

んの。

(セレブリャコフ。ソーニャ。テレエギン、マリナ登場)

テレエギン。閣下、私近頃、どうも少々體の具合が悪いやうて、左様、彼れ此れもう二日間、頭が何てすか恁う……

セレブリャコフ。他のものは皆何處だ、奈何も氣に喰はん家だ此の家は、手もなく迷宮さ、二十六間も馱々廣い室があつて皆てんでばらばらになつてゐるのだから、見付けやうとすりや、何時だつて、見付かつた例はない(鈴を鳴す)マリヤ・ワシリエウナと、エレナ・アンドレエウナとを此所へ招んて呉れんか。

エレナ・アンドレエウナ。私此所てす。

セレブリャコフ。どうぞ皆様掛けて下さい。

ソーニャ。(堪えかねるさまに、エレナ・アンドレエウナの許に駈寄り)。何て云つて? ねえ、彼の方は?

エレナ・アンドレエウナ。後てね。

ソーニャ。あら、お母様、まあ顫えてゐてよ、まあ那様に息を切つて。(継母の顔を、讀まんとするものゝやうにじつと眺る)。私解りましたわ……乾度彼の方はもう此所へはお出て遊ばさんと有仰つたんてせう?(間)言つて頂戴よ、どうぞ、さうてせう? (エレナ・アンドレエウナ頭て頷く)。

セレブリャコフ。(テレエギンに)健康の勝れんのは未だ我慢が出來るが、此の田舎の生活の秩序には到底我





Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

慢が爲切れんよ。何だか丁度地球から星の世界にでも落ちたやうな氣がする。さあ、皆お掛けなさい。ソーニャ！(ソーニャは父の言を聞き着けず、悲しさうに頭を垂れて、立つてゐる)。ソーニャ！(間)聞えない。(マリナに)。さあ、お前も老婆や掛けたら可からう。(乳母は掛けて靴下を編みはじめる)それで皆様、ようく一つ兩方の耳を穿つて、お聞取りを願ひます。(笑ふ)。

ヲイニツキイ。(息をはづませてゐる)。我輩にや御用はないのでせう、若しなんなら御免を蒙りたいですか？

セレブリャコフ。いや、君が第一に肝要なのです。

ヲイニツキイ。ぢや甚麼御要談か承りませう。

セレブリャコフ。貴方にだ……奈何して那樣に不機嫌ですか？(間)若し私が君に對して何か氣に觸つたことでも爲たのなら、どうか勘辨をして下さい。

ヲイニツキイ。お止しなさい、那樣詰らんことを云ふのは、それより先づ其要談と云ふのを伺ひませう？何が君にお入用なんですか？

(マリヤ・ワシリエヴナ登場)

セレブリャコフ。おゝお母樣。それぢや話し出しませう皆樣(間)私は皆樣をお招び申したのは他でもない、即ち檢査官の來たことをお報らせする爲てあります。さて冗談は置いて要事と云ふのは、最も眞面目なことなのです。私が皆樣を集めたのは、皆樣の平常の御親切に訴へて、一つ御相談を

申したいことゝ、猶補助を仰ぎたいことゝについて、お招きを致した譯であります。私は學者で書物ばかりを讀んでゐる人間、日常の生活には全て無關係なのですから、それにはもう這麽ことには經驗のあるイワン・ペトロヰチ君や、イリヤ・イリヰチ君、それからお母樣なんぞ、どうぞ一つ相手になつて補けて頂きたい。其要談は manet omnes una nox 左樣、皆我々は神の旨によつて生きてゐる。私はもう老いました、其上に又病人です、そこで家の所有財産について整理をしなければならん時であると思ふ。これは自分の家族の爲で、家族の爲に何程かでも整理をしなければならんと思ふ。勿論私の生活はもう終つたも同然であるが、然し私にも未だ若い妻があり、娘がある。(間)。それで村の生活は到底自分には續けられない、我々は村の生活には全く相應しない。と云つて、市に住むには此の所有地から上る錢だけでは遣り切れない。若し林を賣るとすれば、是は一時の利益で、毎年之によつて利益を見ると云ふことは出來ない。矢張年々平均した利益を受けることを何か探さなくちやならない。それで今私は之についての一つの考がある、どうぞ一つ相談に乘つて下さい。先づ細かいことは置いて、大體の所を云へば、我々の所有地は、年々平均二分の利を見てゐる。そこで私は此の所有地を賣り拂はふと思ふ。さうすれば其金の預けた利子として、四分或は五分の利を見ることが出來るだらう。其上にまだ其殘金の數千圓を以て芬蘭に些とした別莊を買ふことが出來ると思ふ。

ヲイニツキイ。お待ちなさい……何だか我輩の耳が變になつたやうだ、もう一度有仰つて下さい、もう

一度。

セレブリャコフ。金を銀行證券に換へて、而して殘つた金で芬蘭に別莊を買はふと云ふのだ。

ヲイニツキイ。いや芬蘭ぢやない、君はまだ他に何とか云つたつけ。

セレブリャコフ。私は此の所有地を賣却したらと云ふ相談を持出したのさ。

ヲイニツキイ。おゝ、それだ！君は所有地を賣らふと云ふのですか、此の、それは何とも結構なお考へです……て、我々、老年の母親や、ソーニャや我輩なんぞは何處へお片附けにならうと有仰るのか？

セレブリャコフ。總て此れ等は又都合の可い時に追つて相談することにしやう、何も今直ぐに此所を賣拂ふと云ふ譯でもないのだから。

ヲイニツキイ。お待ちなさい。これまでと云ふもの我輩は全く別に考へてゐた、馬鹿な考だつたてすなあ、即ち此の所有地はソーニャのものである、ソーニャに屬すべきものであると考へてゐた。それと云ふのももと親父が我輩の姉妹の持參金として、此の所有地を買つたものです。是迄我輩は正直に法律と云ふものを考へてゐた、それで此の所有地は、當然我輩の姉妹からソーニャに讓らるべきものと……

セレブリャコフ。左樣所有地は無論ソーニャに屬すべきものです、誰もそれについて異論はない。それてあるから、ソーニャの承諾を得ないて、私は之を賣却はせん、これを私は却つてソーニャの



Digitized by Google Original from UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

幸福の爲に、わざ〳〵惩う計つたのだ。

ヲイニツキイ。そいつは分らん！或は我輩頭が變になつたのかも知れん……或は……或はそれとも……

マリヤ・ワシリエウナ。ジヤン、お前アレクサンドルにさからはないが可いよ、私共よりは彼の方は何でも可い、惡いを知つてゐなさるよ。

ヲイニツキイ。いゝえ、どうかまあ、水を一杯飮ませて下さい。（水を飮む）さあ、もつとよく明瞭と有仰つて御覧なさい、全體まあどう爲樣と云ふのです、あ、何うしやうとね？

セレブリャコフ。可笑いねえ、何だつて又那樣に上せ上つて。私はもとより自分の提議が、絕體な結構なものとは云はん、若も皆に氣に入らなかつたならば、何でも是を强いて斷行するとは言はんのだ（同）

ヲレエギン。（狼狽へて）私は閣下、其の學問てすな、此の學問と云ふことに對しては、たゞに崇拜するばかりぢやありません、殆ど親族的の關係を感じて居ます。私の兄弟グリゴリイ・イリヰチの妻の兄弟、名を申上げればコンスタンチン・トロヒモヰチ、ラケデモノフで、これが其博士なのでして……

ヲイニツキイ。待ちなさいワツプル、今要談をしてゐるのだから……待ちなさい、後で……（セレブリャコフに）あ、此の人に聞いて見なさい、此の所有地は、此の人の叔父樣から買つたものなんだ。



Digitized by Google
Original from UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

セレブリャコフ。だが、何の爲に？那樣ことは聞くにも及ばんぢやないか。

ヲイニツキイ。此の所有地を買つた時には、丁度九萬五千圓だつた、所が、親父は七萬圓だけ渡して後の二萬五千圓は借金となつてゐた。今、お聞きなさい……然しながら此の所有地も、若し其時に我輩が嗣子たる權利を棄てゝ、自分の愛する姉妹に、此の自分に受くべき財產を皆やつて了はなかつたら、無論此の所有地は無いものであつたのです。猶其上に十年の間、我輩は全然牛馬の如く勞働して、殘つた借金をすつかり返濟して了つた。

セレブリャコフ。なまじつか這麼問題を持出して、止せばよかつた、飛だことをしたつけなあ。

ヲイニツキイ。所有地も今は悉皆借金の肩を拔けて、何處も、此處も秩序が立つてちやんとなつてゐる。これは憚ながら誰のお蔭です、これはたゞ我輩の正直な勞働と精神によつて出來たのでせう、然るに今、我輩ももう恁う老年になつた今です、頸部を捉へて追出さうと云ふ！

セレブリャコフ。解らん、解らん、何を那樣に要求するのか！

ヲイニツキイ。二十五年の間、我輩は此の所有地を監督して働き、而して得た所の錢を皆貴方に送つた。全で正直な貴方の手代かのやうに、然るに貴方は是迄だつて、未だ嘗つてたゞの一度も我輩に向つて、禮を述べたことがない。昔から今に至るまで、我輩は貴方から給金として、年にたゞ五百圓のしみつたれ金を受けてゐた！さうして其以上には君は壹圓だつて我輩に出さうとはしなかつた！



Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

セレブリャコフ。イワン・ペトロヰチ君、だが那樣ことを私が奈何して知らうか？私は知つての通り世間には暗い人間だ、若し少なかつたのなら、なぜ自分で構はず殖やさなかつたのです。

ヲイニッキイ。さうです、我輩は何故盜まんかつたんでせう！皆我輩を馬鹿正直とお笑ひなさい！如何となれば、盜むことが出來んのでした、然し若し盜みをしたならば其お蔭で、今頃は乞食にならんぞならなかつたでせう。

マリヤ・ワシリエウナ。(嚴格な聲で)ジヤン！

テレエギン。(はら〳〵して)ワアニヤ君、これさ君、お止しなさい、お止しなさい、私は這厥に顫えてゐますさあ……奈何して那樣穩てないことを云ひなさる(ワーニヤを接吻する)お止しなさい。

ヲイニッキイ。二十五年の間、我輩は此の母親と共に鼹鼠のやうに、たゞ四方に壁のある穴の中に住んでゐたのだ……前には我々の思慮も、感情も、皆貴方一人に捧げてゐた。晝にや、君のことを又君の著書のことを語り、君を以て我々の誇とし、君の名をたゞ崇拜してゐた、夜には夜で一晩中、今となつては非常に輕蔑してゐる所の、君の著書や、雜誌を讀んでまるで夜をつぶしてゐた。

テレエギン。お止しなさい、ワーニヤ君……あゝ困つたなあ……

セレブリャコフ。(怒る)譯が解らん、何を君は要求する意なのか？

ヲイニッキイ。君は我々の爲にまるで神の如きものであつた。我々は君の著書を暗誦してゐた……然し今我輩は初めて目が覺めました。皆すつかり見えます！美術のことを君は書いてゐる、而して

その美術の何たるかを全く解さん、君の勞たる、前に我々の愛讀せし書は今となつては、もう二文の價値もなきものなんです、君はたゞ我々を誑してゐたのだ！

セレブリャコフ。皆樣此の人を可加減に止めさせて下さい！私はもう此所から御免を蒙りませう！

エレナ・アンドレエウナ。イワン・ペトロヰチ樣、もうお止し遊ばせよ、もうお默り下さいまし！聞えますの？

ヲイニツキイ。いや、默りません！（セレブリャコフに道を塞げて、）お待ちなさい、我輩まだ話を終りません！君は我輩の生活を破つた、我輩、生活は是迄無かつたのです、無かつたのです！生活の肝心な若い年頃は、君の爲に破られた！君は我輩の尤も惡むべき仇敵ですぞ！

テレエギン。奈何したら可いだらう……奈何したらいゝだらう……行かう、行かう……（酷く狼狽えて退場）

セレブリャコフ。何を奈何しやうと云ふのだ一體君は？而して又君に、那樣調子で私に向つて物を云ふ權利があるのですか？詰らん人間だ！若し所有地が君のものだと云ふなら、何時でもお引取りなさるが可い、私は入らん！

エレナ・アンドレエウナ。あゝ厭だ、私はもう一刻だつて這麼處には居られない、這麼恐しい地獄には（叫ぶ）あゝもう我慢がしきれません。

ヲイニツキイ。生活は無くなつた！我輩には天才もあり智慧もあり、勇氣もある……若し我輩が尋常

に生活したなら、屹度ショウペンハウエルにも、ドストエフスキイにも……何を詰らんことを云つてるのだ……はゝあ、我輩氣が違つたかな……お母様、失望です！失望！落膽！お母様！

マリヤ・ワシリエウナ。（厳格に）アレクサンドルに逆つちや可けませんよ。

ソーニヤ。（跪いて乳母の膝に寄付く）。乳母や！乳母や！

ヲイニツキイ。お母様！何うしたら可いんです？いや、可いです！何も云はんで下さい、我輩のすべきことは我輩自身で承知してゐます。（セレブリャコフに）奈何するか見てゐれば可いです！（中の戸口から退場、マリヤ・ワシリエウナも其後から尾いて退場）

セレブリャコフ。何と云ふことだ？誰でもあの狂人を私の許から早く退出して下さい、這麽狂人と私は奈何して一つ屋根の下に暮せますか！彼處に彼が住んでゐる（中の戸の方を指して）まるで私と並んでゐるのだ……何處か別の處に行つて了へば可いんだ、或は別の小さい家の方へでも　彼が出なけりや私の方が出る、何と云つたつてもう一つ家にゐることは出來ん……

エレナ・アンドレエウナ。（夫に）。私等は今日中に立ちませう、直ぐ仕度を致しませう

セレブリャコフ。詰らん奴だ！

ソーニヤ。（跪いたまゝ父の方に身をひねり、激しき感動に涙をさへ湛えて）。お父様お可哀さうと思召して下さい！私や叔父様はほんとうに不幸なもので御座います……（失望の胸を抑えて）何うぞお情をかけてあげて下さい。お父様、先の時分のことを御存じですかお父様。あのずつと前の時分、ワーニヤ叔父様、

は、お祖母様と毎晩々々、お父様の書物を譯したり、お父様の原稿を淸書したり……もうそりや一晩中……一晩中！私とワーニャ叔父様は年中止めずに勞働いて、自分には一錢もうつかりとは費やさずに、皆お金を揃へてはお父様に送りました……私共は遊んで御飯を頂いちやゐなかつたのです！あら私、云はふと思つたことを云はないで、何だか別なことを云ひ出しちまつた。だけれど、お父様、どうぞ私達を解つて下さい、お憐み下さいまし！

エレナ・アンドレエウナ。（ときめく胸を抑へて夫に）。貴方、何卒彼の方と穩かにとけあつて下さい……どうぞね……

セレブリャコフ。可しい。よく話合はふ……私は少しも彼を責めない、腹も立たない、然しあの彼の擧動は少なくとも變ぢやないか。ぢや私は行から、彼の所へ。（中の戸口から退場）

エレナ・アンドレエウナ、何卒彼の人の氣を落付かせてあげて下さい……（夫の後から退場）

ソーニャ。（乳母に縋る）乳母や！乳母や！

マリナ。何でもありませんよ孃様、雁どもがガア／＼つて、騷々しい聲ばかりさ、直きに止まりますだよ、ガア／＼つて……直きに止めますだあね……

ソーニャ。乳母や！

マリナ。（ソーニャの頭を撫でながら）。おや、まあ、こら、まるで寒中でもあるんかのやうに、顫えてゐなさるだよ！可哀さうに、可哀さうに、菩提樹のお湯でも拵らはふ、それとも木苺お湯にしやうか

さうすれば顫えるのはすぐに直るよ……もう那様に心配しなさるなよ、可哀さうにのう……（恐ったやうな顔で中の戸口を覗いて見る。）雁どもめがガア〳〵って……何のことだ！

（舞臺の陰からピストルの音がする。エレナ・アンドレエウナの氣たゝましき叫び聲が聞える。ソーニャは顫え上る）。

マリナ。何のこつたゞよ！

セレブリャコフ。（驚きの餘りによろ〳〵と逃げ惑ひながら登場）あつ！おゝ、抑へて呉れ、彼を！抑へてくれ！氣が違つた！氣が……違つた！

（エレナ・アンドレエウナとヲイニツキイとは戸口で取組合つてゐる。）

エレナ・アンドレエウナ。（ヲイニツキイの手よりピストルを捥取らうとあせりながら）。お寄越しなさい、さあ、お寄越しなさいと云ふに！

ヲイニツキイ。構はないで下さい、ヘレン樣、構はんて！（身を振放して駈出し、目でセレブリャコフを探しながら）。何處へ失せ居つた！あ、それ、そこだ！（ピストルを彼に向るま一發を放つ）。ヤアー（間）遣付けたらう？やゝ、しまつた、又反れたぞ！（赫と彼は急立つて）えゝ、畜生！畜生！……えゝ畜生……（ピストルを床に床も碎けよと投げ付ける、力も頭も抜けたやうにぐつたりと椅子に倒れる。セレブリャコフは全て放心者のやうに突立つてゐる。エレナ・アンドレエウナは壁に身を投げ掛けて、氣絶しやうとしてゐる）。

エレナ・アンドレエウナ。誰か私を此所から連れ出して下さい、あゝ連出すとも、殺すとも……まだしも此所にゐるよりは増ですから。

ヲイニッキイ。（失望の體）何をしたのだ、我輩は何をしたのだ！

ソーニャ。乳母や！乳母や！

―― 幕 ――

チエホフ作

夏葉譯

# モルヒネと味噌（喜劇一幕）

## 人物

田舍醫者　松永健一
同　妻
狂人（松永の義兄）　山田清吉
患者　白井武造
同　商人の妻、及小僧
同　他に二人
看護婦　一人
女調劑師　一人

## 場所と時

淋しき新開の田舍町の醫院、天井低き日本室をヤヽ洋風に直して、ペンキを塗りたる粗雜なる診察室、
廣き庭より若葉の匂ひ流れ入る五月の中旬、雨上りの日光が薬末の露に光る。



Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

午前九時頃。

舞臺

診察室の全部を表はす。右は緣を隔てゝ靑葉しげれる庭に面し、正面の奥のドアより藥局及び勝手の方へ通ず、左は壁を隔てゝ患者の待合室、扉にて通ず。壁際には大いなる戶棚あり、ガラス戶を透して外科用種々の機械類及び藥壜、ガーゼ等不規則に並ぶ。中央少し右手に大いなる丸テーブル。椅子三四脚あり、直ぐ左上手に寢臺一個。午前九時頃の日光が靑葉を透けて緣に落つ。

醫者松永四十位、愛嬌ある眼、肉つきよき丸顏、立派なる髯等にて常に微笑せる如く造られたる顏、大量なる如くにして小心、同情ふかきに似て實は我利なる、凡べて矛盾したる性格、肥りたる洋服の上に白き診察衣をつけ、テーブルの上にて何か認め居る、

今頭を繃帶(ほうたい)したる一人の患者、左のドアより外へ出つるに代つて靜かに入り來る患者白井、二十二三歲、靑白き顏に眼くぼみ、觀骨出て久しく剃らざる髯一二分亂る。瘠せおとろへたる細き手を胸に置く。

松永フト眼を上げ驚きがほに立ち上る。

松永「ヤア、出て來られたんですか、よく起きられた。」

白井「エヽ、隨分苦しかつたんです」(忙しき切れ〴〵の息づかひ。椅子による)

松永 (不安氣に)「やつぱりじつとして餘り動かない方が好いのですね」

白井「そうでせう。が今日は僕あ、いつもの貴君のお出まで待ちきれなんだものですから」

松永「まち切れなんだ」

白井「一分もじつと落ちついて寢ては居られませなんだ。何かに早くゆき付かなきあならむ様なあせり心が、もう私をイラ〳〵と追ひ立てゝ、(間)僕夢中に家を出たのですが……」(自分を疑ふ様に)

松永「そうでしたか、然し此處まで能く歩かれた。マア暫らくお休みなさい。オイ看護婦葡萄酒でも少し持つて來い。」

看護婦棚より葡萄酒の壜を出し、柄のつきたる小さきコップに少しつぎて、

看護婦「さあ一口召し上りませ。大變お苦し相で入らつしやいます」

白井急いて唇をうるほすとむせたる如き苦しげなる咳出づ。淚ぐみたる眼にて、ツト持ち上げたるコップの赤き酒を眺めてから恐ろしき幻でも追ふ樣な表情にて、

白井「實は僕今朝あけ方、いやな夢を見たんです、尤も昨夜は呼吸がくるしい上に胸が痛んで暫らくねつかれませなんだが、(間)明け方でした、僕のもう腐れかゝつた、いやづぶ〳〵と腐つて了つた肺壁がだら〳〵と膿血のやうに崩れてゆくぢやありませんか。僕ハット驚いて眼がさめたんです、汗ばんだ手を恐る〳〵胸の上へ持つてゆくと、ひどく喰ひ込んだ肋骨の間へ、私の指先がスウと落ち込みました。ヒヤリとすると僕はもう冷たい石像みたいになつて、手を引く事もビリッとさへ身體

を動かす事も出來ず、凝然と天井を見て居たんです（間）僕は何物からもすつかり離れて了つて眞實に無心でした。暫らくの間でしたが、ほんとに暫らくの間でしたが、あんな快い心境を味つたのは生れてから初めてです、フト氣がついた時には光のつきるランプの音が嵐の樣に高かつた。その刹那、限りもない洞の闇の中に僕はフイと自分の墓場を見たんです。（調子ヤ、亂れて）自分の……

……」

熱心らしく少し頭傾けて聞き居れる松永、此の時、無雜作に微笑

松永「ハ、、、。夢でしたね、胸の苦しい時なぞよくだれでも其んな夢を見るものです」

白井「イヤ、夢ぢあなく僕のはもうほんとに腐つて崩れてるのぢあないでせうか。（ヤ、元氣づいて）先生お願ひです。僕にほんとの事を聞かせて下さい。今日こそ眞實の事を伺ふと思ふと闇と光の分水嶺につゝ立つた樣に戰き乍らも、もう待ちきれない强度の期待心が、ぢつと落ちついて寢ては居られませんでした」（熱心に苦しさを忘れたる如く）

松永「ほんとの事とおつしやると？病氣の容體を聞かせろといふ意味ですか」

白井「エ、、先生、僕の胸はもう洞になつて了つてるのぢあありませんか、もう長くは生きて居られないのぢあありませんか。」

松永「どうして。去年の今頃から考へて御覽なさい。よほど好い方ぢあないか、ナアニ大丈夫です、今暫らく靜養なされば屹度もとの身體にして上げます。昨夜の夢で貴君はよほど昂奮して入らつ

しやる。」

白井「いえ、夢も夢ですが、それはもう先(せん)から伺ひたかつたんです」

看護婦「もう少し如何でございます」（看護婦葡萄酒の盞を上げる。白井恐ろしきものを見る如く周章て手を振る）

白井「お世話になり初めてからもう三年になります。嗚、先生、僕の二十二年の内で一番たのしくなければならぬ此の三年間が、丁度傷手をおんだ青蛇が暗い冷い自分の穴でのたうち廻る様な……月日許りでした。ア丶もう此の上いつ迄も斯うしたみぢめな生活を續けなきあならむのなら、全く生き甲斐が無いぢあ有りませんか（呼吸苦しげに）どうにかならないものでせうか。先生、どうにか……」

松永「そうあせつちあ能くなる病氣も惡くなる許りです。成可く心を落ちつけて氣を永く持たなければ。」

白井「氣を永く……。此の上氣を永くと仰つしやるんですか、あ丶、先生は身體と心を一所にして取り扱うとして入らつしやる。獸ならばそれですむんでせうが……」（苦しき咳しきりに出づ）

松永「けもの？」（解しかねたるが如く周章てツト眼を白井に向ける）

此の時、左のドアを強く音させて、あはたゞしく町家の妻入り來る。黒襦子の衿かけたる袷、セルの前だれ。非常なる狼狽に前後を取り亂したる樣子。抱かれたる十歳位の女の子、絹さく如き黄色い聲してしきりに泣く

白井神經過敏の白き眼をフトうつす

松永「山村屋のお神さんぢあないかどうなすつた？

商人の妻「と、とんだ大變をし出かしまして、背中にいえ、此の子の背中に針を一本さゝらせました。」

（近より乍ら）

松永「フン、針を」（意味のない驚きの表情）

商人の妻「ゆふべから切りになきますので、何處か氣分でも惡いんかと負んだり抱いたり、揺つて歩いて背中をたゝいて居りましたが、（俄に激したる樣。女の子の頭に自分の顔をよせて）あー、背中をたゝいて……たゝくたんびにズブ〱とみんな這入つていつて了つたんだわ、ごめんよ〱。」（聲ふるう。熱き涙ハラ〱と頬を傳ふ。

白井「ヅブ〱とみんな」（白井獨言して身をふるわす。）

商人の妻「けさ着物をきかへさせようと思つて、ぬかせて見ましたら、マア白い糸が二筋背中のまん中からたらりと垂れて……（間）針は頭も出して居りません。」涙また傳ふ。

松永「看護婦、それでは早く、さあ手傳つて着物をぬがせなさい。」

看護婦「ハイ」

看護婦女の子に近よりて着物に手をかけた時、又ドア強く開いて蒼ばしよりたる小僧かけ入る。顔より流れる汗、苦しき息ぎれ。全速力で驅け來たりたる樣。這入るや否や。）

小僧「アッ、お神さん。此處ぢあない〱。此處よかもつと傳馬町のあの門のでつかい醫者どんの方がよろしがすげな。早く〱。うちの旦那の言ひ付けて私をつかけて來たんでがんす。」

商人の妻「エッ。そりや。傳馬町の。岩本さんの事かい。そ、そいでは」

急いていつてぬがせかけた女の子を抱き上げると、フイと氣づいて

商人の妻「あつ！先生ごめん下さいませ。」

周章て二人ドアより退場。

呆氣に取られたる如く松永、看護婦ぼんやりとたつ白井椅子によりかゝろまゝ動かず、三人ヤヽ長き間無言松永おろそかに取扱はれた不快の表情、やがて嘲罵となり、冷笑となつて表はれる。

松永「ハヽヽ。禮義のない町の女には叶ひませんわい」

無意識に煙草入れの箱より一本取り出し火をつけて一口吸ひ、又すぐ煙草盆の灰にさす

白井「己れにもあゝした刹那が有りさへすれば、自分で自分の苦みを取りさる事が出來るんだ。」（白井

唸る如く獨言して ツト立ち上り倒れる如く寢臺によろ）

松永「とんだ馬鹿を見ましたハ……」松永漸く我れに歸りたる如く、初めて白井を思ひ出した樣に

松永「ヤア、ちつたあ、おち付きましたか」

急いて聽診器を耳にはさんて椅子からたつ。白井急いて手を振つて

白井「今日は診(み)て頂くのはよしにします。僕何だか早く家へ歸りたくなつたんてす。」

松永「また我儘(わがまゝ)が出ましたね。然しそれも好いてせう、歩けますか、ぢや靜かにお歸りなさい。」

此の時藥局と並ぶ勝手の方より騷がしき爭ひの聲聞え出す

松永の妻「いけないつたら。そんな方へ行つたらいけないのよう。」

強く袖引かれ乍ら、狂人山田清吉正面のドアより半身を表はす。異様に凄く光る眼。亂したる頭髪。憤怒に激して發言しかけたる動きてとがりたる口もと。手には大きな味噌の竹皮包みを抱えてもつ。

白井狂人をフト眺め、ヨロ／＼し乍ら急いで室をいづ

狂人「放せ、放せ、すぐ分る事ぢあ、弟に見せりやすぐわかる事ぢあ」

松永の妻「シツ！弟だつて。（口を掩ふ様に）ぢや私が先へ先生へ話して來ます」（狂へる義兄を押しのけて松永の妻進み出づ。）

松永の妻「まあ、此の人つてつたら、先刻取つた許りのお味噌を默つて取つていつて了ふんて御座んすよ」（かん高き聲にて早口にいつて了つてから心付きたる如く邊りを眺め人なきに稍安堵の體）

松永「味噌をとつた？　ヤ！」狼狽、すぐるもとに復す。

松永「また出て來たんか、お前は出られん事になつて居るぢやあないか」

狂人「（松永の言葉耳に入らざる如く）盜るものか、誰れがとるものか。己れのぢやぞ、ちやんと札が付いてるぞ。」（竹皮包みにつきたる細き紙札を示す）

松永の妻「僞ばつかし。まあお前さんは默つてお出て。ソラ、松永樣、「極上味噌一貫目とちやあんと書て有るぢないか。其れをあなた自分の名だつて聞かないんてござんすよ。もう一寸の事で盜られて了ふ所を見つけて呼び戻したら、マアあんなに怒つてこんな處まで出て來るんて御座んす。」

狂人「己れのおやあぞ、ちやんと書いて有るが。證據ぢあ、（空に字をかく如く右手の指先を動かして）そら、山田、ソラ山田清吉となあ、それが分らんのか。」（また札を示して松永に迫る。己れの名なる事を信して疑はさる權威ある態度）

行爲より外は考へざる如く

松永「馬鹿。人の家のものを盜れば泥棒だぞ。よしよし。今日だけは許してやる。さあ早く其の味噌を持つてかへりなさい」

狂人「盜るものか、たれが盜るものか、己れのおあ、ちやんとそれ見い、山田清吉とかいてある。」

よみ能はぬ弟を憐み怪む如く

松永の妻「まあ、あなた、やつちまふんですかみんな。此の狂人泥棒にたつた今來たばかしのお味噌でござんすよ。」

狂人「これがよめんのか。憐れな弟ぢや、これがよめんのか……それ己れの名ぢあぞ、おれの、山田、なあ、」

松永（患者の待合室に氣をがれたる樣にて）「早くゆかないか早く。此處はお前共の來る處ぢやない。（今度は妻に）早く連れてゆきなさい、無闇に此處には來てならんのぢや」

松永「だつて、此の盜人がズン／＼來ちまふんですもの。」

狂人「ヒ……。此の字がよめんのか、まんだ讀めんのかヒ……。それ己れの名！（詰問の體にて又札を示す。



Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

顔色先刻とは大分和ぎ、何處やらに誇りの色浮ぶ。松永の妻不精々々狂人を押す樣にして正面のドアより室を出づ
松永意味なき微笑。調劑師藥局より出て來る

調劑師「先生のお言ひつけでございましたとかで白井樣に只今睡眠劑にモルヒネを五日分差し上げましたが宜しうございましたか。」

松永「モルヒネ！何時おれがそんな事をいつた。」

調劑師「あらつ！佐樣でございますか、いゝえ白井樣が近頃胸が痛いやら呼吸が苦しいやらで、寢付かれなくて困るから毎晩ねぎわに呑む爲に五日分ほど頂きたいと仰しやいましたので。」

松永「（少し考へるごとく）今日はよそう、も一度先生が診察した上でと言つて返して貰つておくが好い。」

調劑師「もう、先ほどお歸りになつたのでございます。」

松永「かへつた？（强度の驚愕）不注意者め、もしもの事でも有つたら、何うするんだ。いや己れの名譽をどうしやうと言ふんだ、なあ、おれの名譽を……。」

調劑師初めて恐怖の色表はる。松永周章てゝ白の診察服をぬぎ白井の跡をおりんとする出合頭に。看護婦、待合室より入り來る

看護婦「先生お出かけでございますか何處かへ。只今重患者が戸板に乘せられて參りましてございます。」

松永無意識にたち止る。

松永「重患者、男、若い男ぢやあないか、白井ぢや……。」

看護婦自らの耳を疑ふ如く

看護婦「エ、白井樣。いゝえ女の方でございます。」

松永「またせて置け」

看護婦「大變苦しんで居られます。マア此處迄も唸り聲がきこえますわ。」

松永「唸り聲？ウン唸り聲（顔色變りて）不注意者奴、己れの名譽をどうしやうといふんだ。」

松永急いてドアより退場

調劑師「あのうめき聲は」―（戰く唇より）

看護婦「まあ苦しげなあの唸り聲！」

看護婦、調劑師顔見合せて啞然とたつ。

重患者の唸り聲幽かにとぎれては重く低く響いて來る。

■幕■

――上田君――



Digitized by Google

Original from
UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

# わが身

灰色の空のやうなる戀なればのがるる道のあらばのがれん

思はると云ひてしばしばしば苦しめし捨てられ人のあだし心盡く

もだえ死ぬわが身をかけて毒しぼる搾木の如し床も柱も

悔恨胸にあふれて身浸るもあらぬ名負ふも戀なればよし

うつそ身を忘るる刹那たのもしや捨てて年經し人の心も

あはれぞと打嘆かれし己のみめてられもせじ恨まれもせじ

死の道をたどれる身ぞと知りながら疑ひ泣きぬ君や見ゆると

ひとへにものの光に遠ざかる心と知れど救ふすべなし

堪へがたき秋こぬほどに死にてましはやり病も夏痩もして

おのが身をはかなみ死ぬも誰ゆゑとおしはかられんことの悲しき

この憂この寂しさもみづからが招きしなればあぢきなきかな

もとむるは光にあらず火にあらず氷の釼とこしへのやみ

おほかたの心は捨てぬなほ一つのこれる戀の心を捨てん

夜をとほしあくがれ泣きし心には薔薇の花の露も痛ましし

合歓の花水に浮べはうすものの袂のぬるる心地こそすれ

また鳴きぬよき聲かなとほとゝぎすほめしはずみに人の去りける

見とほして泣きし日よりもとらはれて泣くこの頃ぞやすき運命

——三ケ島よし——

## 習作の四

午睡の快よい休息から覺めると、己う房の光線は淡くなつてゐた。井戸端に行つて眼と爪先きを冷たい水で洗つた。而して狹い房の南側の障子を一枚開けた、其處からは仄白い光りが暗い房を撫でる樣に這入つて來た。

机の前に坐ると、形ちと共にあつた心の苦惱が眠りの爲めに其形ちは失はれて、苦痛ばかりは何と云ふ事もなくのつとりと胸に凭れてゐる事を知つた。

妾は然ういふ胸の中から何か痛切なるものを拔き出して、夫れを紙に書かうと思つた。而して夫れを或る心を許し會つた親しい友に宛てて送る消息にしやうと思つたのである。ペンを握ると、不思議にも、心になき賑やかな氣分が文章となつて並んで行くのを見つけた。見つけてはゐ乍ら、弱い心は其不滿足を何うしやうと言ふ權利をも有たず只書くままの文字に任せてゐるのだつた。夫れも然し書き續く内に、速かに來る憐れな疲勞と、枯れたやうな倦怠がいつか心に宿り入つた事を感知すると共に己う書き差したままでペンを投げ捨てたのであつた。矛盾な心の投影である此手紙は淡紅色の吸墨紙の上に夕暮れて行く空氣の微動を受けてピラピラとしてゐる。



Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

私はつと立ち上ると、開けた障子の二枚の緣へ頭を凭らせ、弛かな初夏の日沒前の悲しい街の物音に耳を傾けて居た。其物音の發る處には、思ひも設けぬやうな不思議なとは言へ同じ苦痛のリヅムに刻まれつゝある人々の生活が在らうと思つた。恰、家では己う夕暮れの支度に忙がしく、米を洗つた水を古く朽ちた流しに流す音をさせてゐる。其音は枯れたやうな倦怠と靑々しい刺戟に飢えた心との矛盾をかき亂す樣なふうに通はせて來るのである。

少時く、雲に蔽れてゐた日が西の方で輝き初めたのであらふ、向ひ側の平家の屋根は一面に其生々しい日光に照り渡つて行つた。輪廓を紅て染め出した靑楓は、己う其艶々とした新綠のなめらかな光りを見る事は能きないが、此初夏の夕暮れの冷たい大氣のゆらめきに會つて其一枚宛の小さな葉をひらひらとそよがせ悅ばしい生の表現を示したのてあつた。妾は此暗い色に續く瓦屋根と、一本の靑楓とを見たきりて、又疲れたやうに机の前に坐つた。而して何と言ふ事もなく肩の凝つて來たのを覺えると長く骨張つた蒼白い左の指を並べて、強く肩の肉を摘み上げ摘み上げした。然ういふ事を爲ると、妾はふと湯に這入つて休んで見たくなるのが平素である。人の肌から流れた汗と垢に濁つた湯の匂をぷんと心に嗅いで、然ういふ湯の中に疲勞と無知覺になつたやうな身體を浸らかせ、眠りにも優さる靜かな休息を得やうと思つた。而してついと立つて先づ鏡の前に來ると、昨日梳き上げた儘の髮は、赤ぼけた色を浮かせてくろづんだ顏にも、白い半襟にも亂れて落ちてゐるのを見た。結び直すといふ煩さい仕事が此場合の氣分より克つ事は能きないのであつた。

妾は湯に行かうとするのも止して、むづ痒い其亂れた頭を八本の爪先きで掻きちぎるのであつた。然うし乍ら、妾は妾の此狭い房を何と言ふわけもなく見廻した。而して今私の仕てゐる事に似た、醜い、陳いけものの皮を見る様な形ちが、其處此處に在る事を感じたのである。次第に息を秘そめて行く壁の色、埃臭い障子、古い疊の濕り。

妾は俯いて、眼を瞑り、疊の上に直然と坐つてゐた。

臺所の方ではピンピンと柴の枝を折る音が爲出した。音に續いて妾の耳には又街の物忙がしい力の籠つた音が通つて來るのである。

恁ういふ何となき壓迫の倚せ來る處に凝乎瞳を据はらせ乍ら、妾は一歩も此房より脱れ出やうとはしないのである。而して恁ういふ灰色の息苦しい心持ちを脱がれ得るだけ何うかして見やうといふ風に、ペンを拾つて見るのだつた。而して此時は正直に、淀みなく、何うして此夕暮れを妾はすごさうと思つてゐるか、などと云つた意味を一字一字現はして行かうとした。而してさういふ自分の表現に努めてゐた妾は又いつの間にか是れを手にして覗て呉れる人の上を何う恁うと考へて見ずにはゐられなかつた。而してさういふ考はつい四五日前に散歩の途で見かけた其人の姿と、最近の手紙との文句を考へしめて來た。而して夫れらから推し及ぶ其人の平素の生活がいとも仄かな紅色のやうに、目に映つた。少くとも妾の目に映つる其人の生活は妾から見れば彩に豊かな、而して何處となき明快な空氣に漲つてゐやうと思つたのである。然ういふものに向つて起る羨みとも妬みとも怨みとも言ふ可き念

は、其時つねになくむくむくと頭をもたげ、さうした晴れやかな生活の前に斯かる愁患な哀訴の形が何うして擴け讀まるるかを思つて見たのだつた。

然う云ふ誇を失つた刹那の悲しみは、又書き差した五六行の文字を措かせ、ペンを捨てさせた。而して其刹那、むかうの方から手紙の來る迄は、何れだけの苦痛を嚙み締めても決して此方を語つては遣るまい、何れだけ自分の誇りを失はずに傷ッけずに在らしめるだけは辛抱して見やう、此う思つて見るのだつた。而して其覺悟のために幾らか安じた心の形ちにほほゑみながら、其人の面影を描いた。黒い瞳と潤んだ睫毛を思ひ浮べ、際限もなき土色の壁の前に其人の背姿を思ひ出した。

妾は又耐らぬやうに顔を埋め机の上に喰ひ付いてゐた。

遣る瀬ない、惛ういふものゝ中に何時か又浸つてゐるのを知覺するのである。

然うする内に、臺所にも、机の上にも非常に明るい光りが置かれた。何時の間にらんぷを點して貰つたかも知らずに俯いて眼を瞑つてゐるのだつたから。

房を見廻すと速かにも、音なく夜は夕べを退けて來てゐるのである。

而して其刹那、今日も一日何も爲ずと、況して何の考をも爲ずに終つて夜に這入つて行く事を思つて見た。而して此暗い胸を有ち乍ら食卓の前で箸を鳴らし無言で人に向ひ會ふと言ふ苦しみが耐えられぬやうに思つた。

妾は又、茫然として房を見まわした。房の總ては俄かに鮮かな光りを漲らせて、天井には大きな輪

を作つてゐる。机の上には清水で買つて來た塔が銅色の屋根をそびえさせ、靜かに沈默してるのであつた。

　此玩具の塔は不良い繪具で彩られてゐるのだけれども、らんぷの光りにあてて見ると、非常に精致な手で作られた藝術品か何かのやうな威嚴を備へてゐるのだつた。其細かく刻んだ屋根も、深い影のために無數の瓦で出來た大きな屋根を思はせ、朱の色で塗られた欄間には鑿の姿でも停めてゐるかの樣に思せる。莊嚴な殿堂だとか何だとかを心に幻を作り、而していろいろの空想を描いた。昨日見た紅葉狩の幸四郎の鬼女の姿、夫れさへ印象の中から現はれ出るのである。而して或る雜誌とも何とも付かないものへ、幸四郎を賞めて書き送つた事を思ひ出し、今少し大膽に言へばよかつたなどと考へても見た。

　妾の心は、然う言ふ花やかなものゝ前にふと浮き上つたやうな弛みを有つてゐるのだつた。

　外は、已う悉かり夜となつたのか、媚めかしい聲と、下駄の音とがきこえた。妾の家の近くには幾つかの中座敷が在る。夫れに通つて來る人の下駄の音は、何處か違つて妾には分る事が能きた。

　然ういふ人の、何ういふ心持ちにあるかを思ひ浮かべる前に、先づ其賑かに迎へられる調子かさも輕ろく漂ふに任せてゐる生活のやうに見えるのである。

　茲に轉宅して來る前までは、裏に秘そむ暗い漂泊の生活を思ふまでに、華美なさうして其處に深い底を根強く有つてゐるかの樣な表面ばかりを見て憬がれるほどに慕はしかつた。妾は已う然うした夢



Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

の悅樂に耽ける程心の處女でない事を思ひ知るのだつた。あゝいふ肉樂の底には何うした暗闇な苦痛が根深く擴げられてゐるかを思ひ見る時に、心はとざされたやうな痛みと恐怖に充ちきるのだつた。

不意に、此房の襖を開ける人があつた。黑い姿をして訪れて來た其人は世木といふ美術評論とでも言ふ風な仕事に終日浸つてゐる人だつた。

妾は慌しい怖れを抱き乍ら其人に向ひ會つた。何か特別の心持ちを有つて、女を視める人がある、丁度此人は然ういふ風なんだ。此度の南座の幸四郎劇は何うか、恁ういふ話しが緒に措かれた。成駒屋は新らしがらふとて近松を忘れて了ふ。恁う、自分と緣遠い話しを聲を高めて罵り逢つた。

此人のために、妾の夕餉は晩くれて行つた。臺所では已う夫れが初まつてゐる。

其人は歸らふとしてから、已う少し切實な態度と現實を忘れぬと言ふ謹嚴なものを女はまなばなければならぬ。新らしいとか言ふ女を疑ふ、恁う言つて、やがて又自身をも冷笑の中に認め乍ら、苦しい心持ちを抱いて歸つて行つた。

虛僞、假面、さういふものの中に女を追ひ込めて視てゐるあゝした人達ちは、何ういふ嚴威を有つてあゝした事を言ふのかと疑つて見度くなるのであつた。

妾は幾らか空腹を覺えて一人分殘つた食卓の料理に向つた。

臺所からは、外の足音が手に取るやうに響いた。石疊みを蹈んで來る人は、直ぐと藝者か媚めかしい聲をする仲居だと言ふ事が解つた。然ういふ人を、輕るく叫び迎へるお神の愛嬌らしい聲もきこえた。



Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

「柊屋の方は、中村屋よりかようはやつてるえ。」
と次の間から縫物をしてゐる人は恁う言つて妾と語る爲めに茶を飮みに來た。
『さうですかねゞ』
とそつけなく言つて、海苔の匂を嗅ぎ乍らお茶漬を搔き込んだ。
而して又自分の房へ這入ると、讀むでもなく、書くでもなく、疲れたやうになつて眼を瞑つた。恁う腐つたやうな、黴とでも言ひさうな室の一種の匂が漂つて來た。然うして妾はふと何處か散歩でもして見やうかと思つて見た。何處と言つて行く處もないけれども。
で妾は直然と身をつくらつて髪も其儘にとき上げて見た。然うして何と言ふ事もなく押入れを開けて見た。散亂として蕪雜に並んだ何が何か分らぬやうな種々のものを見ると、妾は又苦しいやうに成つて來た。懶い、とも言ふ可き心が、疲勞らしく胸に凭れて來るのだつた。
とうとう、散歩までも妾は止した。妾は其手で、押入れの前の處から夜具を取り出し、夜の床を伸べて寢やうと思つた。
『おお、己うお休みか。』
恁う、次の間からきこえた。妾は冷たく笑ひ乍ら寢捲きと着更へて、飛び付くやうになつて床の中に這入るのであつた。而して夜具の襟を兩の手できつと顏に當てて、溜息でも突くやうな眞似をした。
暗黑な高い塔の影が朧ろ氣に胸に現はれてくるのだつた。



Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

而して其翌朝になる迄、何の苦悶も知らぬものの様に安らかに貪り眠つてゐるのだつた。一面に房にはが射して、朝の街の物音が又新らしい生活を擴げて行くやうに騒がしくきこえて來る頃に、ぬつとして起きて見るのであつた。

昨夜に、何事があつたか、昨日の気ちは何うだつたか、夫れさへ忘れてゐる樣な心は、然し根深く何となき苦痛の暗いものだけは依然として抱いたままで眠より醒めて來たのである。眠りの中にも休息みなく生活は刻まれてゐるに驚くやうな發見をするのである。見た夢の名殘りとも言ふ可き朧ろげなものは何處か腦の中に遺つてゐた。可懐しい人、然ういふ人を夢の中にまで見つつ、然うして夫れが夢の中にまで苦しく刻まれて居た事を知つた。

妾は朝の食卓に向つてから、又房に這入つた。碧瑠璃に晴れ渡る空天は涼しい白い日光を清げに室の隅まで投げわたした。

『花を買つて來やうか。』

何處か出かけて行くらしい母は、序でに妾の爲めに花屋へ寄つてやらうと思つたのかして恁う言ふのだつた。

間もなく、妾の机には、塔の他に姫百合の赤い花が瓶の中に浸されて置かれた。濃赤色の花瓣と青青しい葉と葉とは古いものの中に彩るやうに見えた。

尙暫くすると人からの消息が繪葉書の裏に認められて投げ込まれた。夫れを手に載せて見た妾は、

止みがたく心の募はしさに震るへつつあるを認めた。而して其消息は、近來の不健全な自分の生活を呪つてゐるやうな一端を見せてかいてあつた。妾は直ぐ何か言ひ返へさなければならぬと思つたが、何となき慌しさは己うさうした沈着と努力とを失つて、語る事はやはり會つて言葉に出すに優さるもののないやうに覺えた。今夕、散歩の次手に會つて見やう、然う思ふのだつた。

少時くすると、妾には妾の望まない用事がやつて來た。妾は夫れを午を越して殆夕暮れ近くまで働いた。其間も、妾は妾を考へて見ずには居られなかつた。

藝者の手に通る白縞の美しい襦袢を縫ひつつも、妾は昨夜世木と云ふ人が言ひ遺して行つた事を考へて見ずにはゐられなかつた。

能く自分を凝視せよ。省みよ。假面を棄てなければ、眞面目に返らなければ……。

然し根深く固着してゐる女といふ皮を、性質を、其處まで脱ぎ棄てて了ふと言ふ事が、よし出來る能であつた處が倩夫れが何うならふか。

赤い血液の中に何時と云ふ事もなく混和つたバニテイとも謂ふ可きものを、總ての成長の他に消滅させて了ふ事が能き得やうか。そうした新らしい力、果して妾共に見る日が來やうか。然う言ふものを期待するに先だつて、妾は此小さなと言ふ程の誇りを滿足せしむる日が何かの形象を借りてやつて來るてあらう。恁う依賴まれて止まないのであつた。

妾は仕事を終つてから、疲れた樣になつて机の上に手を措くと、初めて悦ばしく涼しいものに飢え

た樣に姫百合の緋色な花に見惚れるのであつた。妾の膝の身じろきに連れられて、姫百合の花葩はひらひらとゆらめく。

妾はさうした物哀れさを誘ふやうなものを見つゝ、思ひ窘まつたと言ふ風な胸の暗い影を思ひ出すのであつた。瞳を瞪らせ、曇つた硝子戸を透かして哀しい夕暮れの音なく夜に入る姿を茫然として見つめた。何處の家から來るとも知らぬ煙が薄すく立迷ふてゐた。湯殿を思はせるやうな匂がなつかしく涙を誘ふほどに通つて來る。

夕暮れとならば、さういふ風に聞き做さうとする爲めにか、街の物音は急がしげに、何れほど窘しい生活の一日を終つたかを知らしめる樣に、些の弛みもなく迫つて、妾の胸に通ひつげる。

厠の裾からでも出て來たやうな黒蜂が已う夏の夕べを告げるかの如く板塀の前を幽かな姿をついついとして飛び舞ふのだつた。妾は物忘れした人のやうな顏をして夫れを一心に見つめてゐた。

然う言ふものを凝視めてゐる內に、何とした理(わけ)か妾のくるくると無連絡にも止め度なく描き出す腦裡から、ふと亡兄の死像を思ひ出した、其顏は、夕陽のために半面蒼黒な陰影を落してゐる。妾は、はつとして、湯に行かうと心に語つた。而して狂ふ樣な心持ちを巧みにも人々には穩かに秘めて、金盥ひを抱へて外に出るのだつた。

白い道路は、蒼く、黄色な光りを漂はせ、灰色の家々の屋根は靜かに默して重さうに垂れてゐるのである。



Digitized by Google

Original from
UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

未だ點火するほどもなかつた。妾は湯屋の入口の戸を開けると、已うぷんと嗅ぎ慣れた湯の匂を吸つた。

四五人の人々は、仄白い背と腕とを立迷ふ湯氣の中に動き働かせ、折々寢ぼけた樣な聲で簡な語を交はしてゐた。妾はシャボンの泡を兩手で肌に塗りつけ、水を含んだ板の上に兩足を伸し乍ら、うつとりとした樣な懶さを覺えるのである。油ぎつた湯面には、銀色の外光がちろちろと散りゆらめく。此湯の中にも、妾は凝乎(どつと)する事を得爲ないで慌しく出るのだつた。四五人の人は近所で見る顔が多かつた。口を利き、物語る、夫れが今の務めには辛いから。

家へ歸ると、金盥を人に渡し時計を手に握つて又急いで外に出た。然して直ぐと電車を見つけて乘り移ると、少許の沈着きを心に覺えた。窓から外を見ると、飴色の空に黑づんだ悲しげな雲の群がりが弛るく動めいてゐる西の空に、線路の電燈がちらちらと瞬いてまた夜の世界を彩んとするのである。

電車を下りて少し行くと、何の街の家の印象にも、みな夫れ夫れ悲しい過去の思ひ出の絡はりつゝあるを思つた。漠然として境遇に迫る苦痛。………然うしたものは、ふと自分をして年齡に似合はぬ程の苦勞とも云ふ可きものを舐めて來たかの樣に思はせる……。

いとも靜かな御苑内は、廣い砂の路上に、黑づんだ松林の上に、日沒の寂寞がみなぎり渡つてゐる。際限もなく廣いものの樣に思はせる此御苑内の片隅を妾はつくつくとして歩いて行くと、松の影に、待ちつゝある人を認めた。

少時くして二人は並んで歩るくと、其人と妾との仲に立ちて双方を疑ひの中に、或は親みの中に探す飢えた犬のやうな役目を務める人を、其人も妾も口に出した。

『何故、あゝつまらない男だらふ……』

其人は自分等の爲しつゝある事を努めて明るく見やう。恁う思ふ人だつた。

二人の前に、未だ水垢(みなごり)の床を離れたばかりの螢が、痛々しいばかり細い光りを放つて草叢にまたゝひてゐた。其草叢の前には冷たい細流があつた。男の手で叩かれた螢の青い火は消え入るやうな光りをして水に流れては岸邊に這ひ上ぼる。

『周圍の爲めに僕は結婚しやうかと思つて。漸く然う言ふ眼が開いたのです。』

恁う、小暗い松林の邊りへ來ると、靜かに妾に言ふのだつた。

知らぬ間に、速かにも夜の來て了つた事を妾は見た。星晴れの空天を見仰ぐと、強い光、碎かれたかけらの様な光、初夏の宵空は悉かり星で漲つてゐるのである。松林、宮殿を取り圍く塀、然う云ふ重苦しい大きな一圍は其處此處に伸び渡つてゐた。怖ろしき程に其姿は眞つ黒な色をして。

『何れ、終りは慘めなものだと誰人かが言つた。』

何う言ふ風に、此胸を言ひ告げやうか恁う考へては言葉を撰ぶらしく。

全く、此邊りは人通りもなかつた。松葉を鳴らす風の微動(とよ)ぎ。蟲の飛び歩く様な音、然ういふものが靜かな耳底(みゝ)に通つた。

何時となく二人は袖を合はせてゐた。古い家の爲めに、父の爲めに、夫れ等の願ひの儘に身を預け樣とする、青年の終りに逼まられた優しい男の姿を其處に見た。弱い、然る忍ぶ心の裏に、生活と言ふ泥の嗅ひの樣なものゝ前に、何れほど安靜な、而して強い道が拓けて行くかを思ふと、生の窮極は決して夢の憧憬ではなく、實際の道の何程に丈夫な、而も意義ある波浪が打ちつゝあるかを思はねばならなかつた。

妾は此人に離れて、も猶穎れた心を何うする事をも爲さずと沼の汚れた水を視つめて一つ日を消して行くを思つた。

『僕等の周圍は何うにしろ敎育の有る女は收まらない。厭惻に忍耐する樣な女が欲しいと思ふ。』

傜う言ふかと思ふと、

『藝者なんか、何うかと思ふ。』

妾は此人を何う疑つて好か解らなかつた。只止み難く戀しい、傜う思ふ心を、努めて言葉には爲ずと、平氣で平坦な談しを續けてゐるのだつた。

『少時く逢はずにゐませうか。』

頓て、傜う言ふ聲が温かい唇から出るのだつた。

『何うとも。然う自由な事は能きないのですから。』

傜う妾は聲を微かにして言つた。

杖の先端で草の頭らを撫て廻し乍ら、靜かに溜息をつくと、
『青年らしい大膽な道と、犧牲になつた靜穩な道と、孰れが僕等の撰ぶ道か知ら。』
戀う胸に餘る、と云ふ風に。
くたびれた樣にして、歩き出すと、可なり夜の深くなつた事を告げる樣に、寂とした邊りに風は響いた。見ると、夜の潤氣は冷たく肌にあたり、廣々と開展した空には水蒸氣に反映する街の灯が仄紅く彩つてゐるのだつた。

■姫百合の花を瞰つめつゝ■

——杉本まさを——

# 或る夜

娘はグッと體を伸ばしてフト目を覺した。

知らない間に家の人等は起きて終つて頭の上の小窓の戸も庭の方の雨戸もカラリと開けはなされてすが〳〵した朝の空氣は自由に室の中を流れて居た。

「まあよく眠つたのね！」

誰れに云ふともなく娘は一人言を云つて半身を起き上ると兩腕を力一つぱいに伸して見えもなく欠伸をした、それでも未だウットリとした柔らかな眠が體にまつわつて離れぬ様な氣持てあつた。

もう臺所はひつそりとして終つて母親は長火鉢の前で煙草を吸つて居た。

娘は白い寢卷の儘楊子をつかひながら椽側にしやがんてジッと庭を眺めた、庭には未だ朝露が玉になつてポロ〳〵と光つて居た、地面に水氣をふくんでしつとりと落ちついたコーヒー色を見せてゐる。

隅の方に茂つたクローバーの葉は力一つぱいに綠の瞳を見ひらいて青空を眺めて居る様で、それから夏薊の芽や石竹やオランダイチゴの小刻みな少さな葉迄も葉先に露をふくんでシャッキリと立て直してまるて一晩の内に庭中のものが蘇生返つた程生々として居る。



Digitized by Google
Original from UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

娘には冷たい椽側の板が温かな自分の足のうらに冷々と吸つくのも快く思はれた。まぶたからかぶさる樣にポーッと上氣して居た氣分が自然と新しい朝の空氣の爲に落ちついて來る樣であつた。

娘はもう何とも云はれぬ程すが〳〵した氣持がして只もう譯もなく滿足な情が胸一つぱいになつて誰にでも甘へつき度樣な氣持になつた。

それから一時間もかゝつてお仕舞をしたり髮をなでつけたりして其が出來ると娘は母親と二人ぎりでおとなしく朝飯をすました。

「あゝ好い氣持！……お母さん今日は休むわ」

娘は火鉢によりかゝつたまゝ一寸屈んで、るり色の空を眺めるとこうさけんだ。

御飯の後は必ず娘の爲に母親はお茶と菓子を出してくれるのが習慣になつて居る。

今日は白いガラス鉢の中に水色をした薄荷の入つた小供の食べる菓子を入れて出した。そして今娘の云つた事を何とも思はぬらしく平氣で聞いて居た。

「休んでも好いわね！お母さん……」

娘は自分の職務を怠ると云ふ事が一寸氣になつたので母に同情をもとめる樣にこう云つて見た。

「休みたければお休よ、お母さんはどつちでも構ひはしないから」

母親は茶飲を唇から離すと呑氣そうにボンヤリしながら云つた、そんな事は氣にもとまらないと云ふ風であつた娘は母親の平氣なのを見るとよう〳〵安心する事が出來た。そしてすつかり罪が消えて



Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

終つた樣な氣持がした。
今日は休のだと思ふと何となく心が伸々として、わけもなくうれしくなつてくる。
やがてお茶がすむと娘は明るい所に新聞を持出して自惰落な樣子をして其を讀み始めた。
其間に母親はおつきの乳母かなんぞの樣に娘の食べちらした器物を下げたり火鉢のまわりを片つけたりして居た。

娘は久しい間新聞を一ぱいに廣げて雜報などを見て居たがフッと樂しい事が何處かの蔭で自分を待つてゞも居る樣な何かしらソハ〳〵した心持がして來ると、今迄ボンヤリして居た事が急にくやしい樣に思はれてきて新聞をグイと片手でつきのけて終つたそして暫時ジッと考へる樣な顏をして疊を見つめて居たが急に荒つぽく立上ると緣先に出て透き通る樣な青空をじつと見つめた。
空の下には遠くの森や丘や畑などが廣々と見渡される、そして其等のものは皆キラ〳〵と朝の日を受けて色ガラスでも並べた樣に種々樣々な色に光つて居る。
娘はフト樣々な空想をし始めた……此果てもなく廣がつたるり色の空の下には綠の野がかげろうの浮き立つ樣な美しい色に見渡される所もある事なのだろう、そして銀の樣に光つた流や森や林や美しい景色がもう果てもなく起臥して居る、そしてまた此大きな都會の中には數限りもない人等が住つて居て其等の人等は凡て自分よりもずつと〳〵幸福な身の上に生れて居るのであつて此温かな光の下

て自由に行き度い所に行き遊び度い事をして遊び氣まゝ勝手な仕度一ぱいな面白い思をして居る事てあろう……自分許は此小さな箱の中の様な家の中に一人ぼつちにすてられて誰れもかまつてくれる人もない……

「私も何か面白い事がして見たい！」

娘はもうじつとしては居られぬ様な心持がしてきた――が考へて見ると娘には面白い遊び場所になどつれて行つてくれそうな人は一人も無いのであつた。

娘はそう氣がつくと胸がすぼまる様な氣持がした、そして浮き立つ様な樂しい心持はすつかり消えて終つて其かわりに今度は色々な悲しい事や情けない事許が胸に浮んでくるのであつた。

娘は耐らなくなつてうつたへる様なうるんだ瞳をしてソッと振返つて家の中を見廻したが火鉢の前の少さな表情も何もない氷つた様な母親の顔を見ると一層深かい絶望と悲しさとにさそわれて來た。

娘はもう自分程不幸な哀れなまづしい此世に生れた甲斐のないものは自分の外にはない様に思はれたのであつた。

娘はもう力のぬけた様な顔をしておとなしく小猫が家の中を歩き廻つて居る様に椽先に腰をかけてじつと庭の草花を見つめて居たり火鉢によりかゝつてぼんやりと物思に沈んで居たりだるそうに柱によりかゝつたまゝいら／＼した目つきをしていつ迄も暮れそうにも無い明るい空を眺めたりしてとう／＼一日を音もなくくらして終つた。

娘は今日程つき離されて終つた樣な賴りなさと淋しい物たらない……それて居て耐らない程の戀しさとに取りつかれて居た事は無かつた。

瞳許は熱病にでもかゝつた子の樣に熱つい燃ゆる樣な光がみなぎつて居た。

かゞやいて居た光がだん〳〵西にかたむいて行くに從がつて娘の胸は大きく浪立つてくる樣に覺えた。

まじりけのないコバルト色をした空が一としきり紅を流した樣に變ると今度は東の方から少しづゝ沈んだ綠色をした菲方の色か靜かに廣がつて行くのであつた、丁度水の中に繪の具がだん〳〵とけ込んで行く樣に極く〳〵ゆるやかに夜の世界に入つて行くのであつた。

娘は一刻一刻夜の色の深かくなつて行くのをじつと緣に腰をかけたまゝ胸をおどらして眺めて居た。

「今時分、どこに行くの」

母親は娘がいつか知らない間にをやんとした外行の着物を着て立つて居るのを見ると驚いて少さな目を見はつてこうきいて見た。

「私? あのうお君さんの家迄行こうかと思つたのよ、一寸用事を思ひ出したから」

「だつて、おまへ、もう暗くなつて終つたじやないか……」



Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

と母親は止めたそうな顔をして云つたが娘は平氣で知らん顔をして出て行つて終つた、母親は門口に立つてじつと我子の後姿を可愛そうにして見とれて居たが

「明るい内に行つてくれれば好かつたのに………」

と心配そうにつぶやいた。

外はもう深かい綠色の水がたゞよつて居る樣な夜に變つて居た。

空にはチラ〳〵と銀の花が咲いた樣に星がかゞやき初めた、が夕ぐれの名殘りは未だ西の果ての森の頭の上に一すじのレモン色のリボンをかけた樣に美しく光つて居る、娘は明るい店の中から自分の横顔を見られるのが何となく厭はしく思はれたのでなるべく薄暗い道をえらんで歩いて居た。そしてもう或る力に引かれて行く樣な心持で早足に歩いて行つた、時々うれしそうな顔を上げては靜かな大空を見上げながら………

娘は暗らいドアーが内から靜かに開いて行く時にもううれしさに胸がおどつて居た。

中の光りは流れる樣に走つて暗らい階段にたゝづんだ娘の半身をくつきりと浮べ出した。

娘はもう何を考へるいとまもなくまばゆい程光の滿ちた室の中に小蝶の樣に身をひるがへして入つて終つた。そしてぴつしやりと戸をしめきると自分の望も願もすべてがもうこゝて解決されて終つた樣な安心とがつかりした心持が廣がつてきて思はず深かい吐息を洩した。

室の中に住んで居る若かひ男は窓下の椅子によりかゝつて默つてじつと娘のする事を見守つて居た。

娘は男の姿を見るとうれしそうにイソ〳〵して其傍に行こうとしたが其刹那、何かにグッと胸をつき返された樣に感じて思はず立止まつて終つた。

そして半ば無意識に室の中を見まわした。

室の中のすべては靜かで亂れては居なかつた。室のまわりに取りまわされた棚にはめづらしい色々な植物や草花などが幾段にもなつて並んである。そして其等の植物から放つ生々とした野や森を思はせる樣な芳烈な香は待ちうけてゞも居た樣に娘の體にまつわつて來るのであつた。

娘は何かしら物にとがめられる樣な氣持がしてきた。――今自分が入つて來たと云ふ事は其邊のものがひどく嫌つて居るかの樣にも感じられた。

今迄此室の中の凡てのものと此男との間がぴつたりと寸分のすきもなく調和して正しいそして靜かな進行をつゞけて居たものがフト外から自分が入つてきた爲に尊い男のきづきかけた或者を亂して終つた樣なそんな恐しい氣持もしてきたのであつた。

娘は此室に入つた事が大そう惡るい事をして終つた樣に思はれたので暫時極りが惡るそうにもじ〳〵して立つて居たが

「あら！　私が邪魔だつたのでせうか」

娘は思ひ切つてこう小聲に云ひながらはゞかる樣にソッと男の顔を眺めて見た。

男はあたゝかな表情のある瞳をして一寸娘の顔を眺めたが笑ひながら頭を振つた、そして右の手を上げて椅子を與へる心持を見せた。

娘は云はれるまゝに腰をかけたけれど今夜に限つて心が落ちつく事が出來なかつた。

何んだか暫時こなかつた間に外の物に自分の居る場所をすつかり占領されてしまつた樣な間の悪るいとけ合ない心持がした、それで娘ははりつめて居た心持もすつかり拍子ぬけがして終つて男に向つて云はうと思つて居た言葉も皆忘れて終つた。

冷たい白々した室の中の光りが少さな胸をさす樣に感じた、娘は此室で此若かい男に逢ふ樣になつてから今迄の間に今夜の樣な不思議な氣持を味つた事が無かつた。

こう或る目に見えない形も何もなくて其て居て不思議な强よい力でもつて此男や自分の心をじつと押しつけられて居る樣な物に魅入られた樣な心持がして居る……娘は今逢ひ度い逢ひ度いと思ひつめて居た感情の捨て場がなくなつた樣な氣持がした。知らず〳〵雨の目には涙がにじんで來る樣に覺えた。

久らく二人の間には言葉をかはしてはならないもの丶樣な沈默がつゝいて行つた。

「疲れた!」

突然、かなり高かいはつきりとした語調て、けれどどこやら勢のぬけた聲が靜けさをやぶつて男の

口から洩れたので娘は不意に叱りつけられた樣にびつくりして終つた。
「エ」
おど〳〵して娘はうるんだ目を上げて男を見た。
「なに、何人でも無い、僕はね今日は實に熱心に勉强をしたので頭がすつかり疲れちまつたのさ」
娘はやさし味のあるふつくらとした若かい男の聲が電流の樣に體につたはるのを覺えた。物に饑えた心は自然と目さめた樣な心持がしてくるのであつた。再びやさしい言葉が男の口から洩れてくるのを心ひそかに待つて居た。
けれど其は無駄な事であつた、男はまた靜かに物を思つて居る樣に見えたが娘はそれは決して自分の事ではないと思つた。
室の中央には大きなテーブルがごうまんそうにすえてある其の上には娘には名も解らない高山植物や北極産の蟲の樣な苔の花や不思議な色々な植物が一つぱいに取りちらしてある……顯微鏡は黑く冷酷な光を反射して居る、其他壁、棚、机、此室の中にある有りとあらゆる空虚な場所は凡て不思議な未知な世界から入つてきた樣な異樣な植物や苔類の標本で滿されて居る……娘はそれらの物を眺めて居る内に次第に心が寒くなつてくる樣に感じてきた、そして此若かい男の美しい體も心もすつかり怪しい色々な植物の靈魂に取りつかれて居るのでは無かろうか……娘はそんな事が胸に浮んでくると恐しい幻に目の前をかすめられた樣な氣持がした。



Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

もう自分が住つて居る此男の胸の中にすら此植物の妙な香がしみ込んで居てもう自分の入るべき所も無くなつたのではなかろうか……。

娘は自分などゝは何の交渉もない研究熱や好奇心とした様な或る力が此男を取りまいて居てどうしても男に近よる事が出來なくなつたのでは無かろうか……娘は云はう樣もない深かい悲しさと孤獨の淋しさとにおそはれてきた。

と不意に力のある腕がしつかりと娘の肩をいだくと冷たい唇がふるへて居る娘の唇を强よく押した。

娘はあまり思ひかけなかつたので飛び上る程驚いて兩手は無意識に重い何かをおしのけ樣とした……と若かい男はプイと娘をつき離していかにも腹立しい樣な荒らい足どりをしてテーブルの向ふのソーフワーに體を投げ出して兩手で頭をかゝへると目をつぶつて終つた。

娘は男のおこつたそぶりを眺めると大切な器物でも毀して終つた樣な悲しさが胸にこみ上げてきた。

冷たい瓦斯の光はあざける樣に二人の上をてらして居る娘の首すじは蠟の樣に血の色が無くなつた……娘は男に知れない樣に泣いて居るのであつた。

男は暫らくするとすんだ瞳をじつと開いてあはれみと皮肉な思とを表して娘の髪の形などを眺めて居たが今忍ぶ樣にそつと首を上げた娘の目とハッタリ瞳が行きあつた。

娘はふと其瞳に出逢ふと今迄物におびえて居た樣な弱々した心は急に不思議な程はりつめた反抗心

と變つてムラ〳〵と胸をついて上つてきた。

じつと男の瞳を見つめて居る内に娘の胸の中には或る大膽な復讐が浮んで來た。羊の樣にうなだれて居た少女の顏には何か或光明でもみとめた樣に活々とした血の色が走つた。

娘は落ちついたそして靜かな歩調で椅子を離れて薄灰色の植木鉢の並んで居る棚の前に歩みよつた、そして其等の鉢に觸れる樣に白い顏をさし伸べて靑々した新しい草花の香を胸一ぱいに吸込んだ。

「オヽ、好い香ね！」

ひくいけれどいかにも腹立しい語調でつぶやいた。そして幾度か胸をおどらしながら男の丹精して養育して居る植物にソッと片手をかけた。

細いしなやかな指の先の爪は鋭いナイフの樣に鉢の中の柔らかなすき通つた綠色の莖を音もなくち切つて終つた。室咲の弱々した灰黃色の花や藤紫の玉の樣な實は冷たい床の上にポタ……ポタとかすかな響をたてゝ散つてしまつた。

娘はいたましい花の姿をしばらくじつと見つめて居た。顏にはすつかり血の色が退いて終つて化石の樣に動かない。

男は其を見るとサッと顏色が變つて終つた。そして立上ると何か口を動かしたがまた打消す樣に首を振つて倒れる樣に椅子に腰を下して終つた。そしてじつと娘の顏を睨んで居る、其目の中には憎と怒の心がもえて居た。

娘は男の失望した恨めしそうな靑い顏に變つてゆくのを見て居る内に何んだか自分の豫想がすつか



Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

りはづれて終つた樣な氣持がした。そしてはげしい不安な思に責られてきた。

男の胸の中にある美しい自分の幻影が一刻一刻にくづれてゆくのがハッキリと感じられた。二人の仲はもう今宵限に迫つてゞも居る樣に思はれてもう耐らなく恐しくなつて來るのであつた。

室の中は恐しく靜かになつて終つて暫時の間はガランとした空虚が凡ての物の上を包んで終つた樣に感じた。發作的に起つてきた針の樣に尖つたヒステリーな娘の心持は次第に常の物おぢのする温かな美しい氣持に返つて行つた。

と娘の體はもうはげしい悔悟と恐怖との爲に中心を失つて終つた。

「私！　どう、どうしたら好いでせう！」

娘はよう〳〵こうさけぶと男の膝に顔を押あてゝ泣き出した。

男は熱い娘の顔が自分の膝の上にのせられると何かしら重い責任を感じてきた。そしてはげしい憎も怒も其責任の前に立つては何の力もなくなつて終つたのであつた。

男は久らく苦しそうに息を呼吸して居たが

「……今夜はもうお歸り……」

よう〳〵かすれた聲でつとめてやさしく娘の耳もとで云つた。そして抱く樣にして娘を戸口迄つれて行つた。

娘はもう氣のぬけた樣な顔をして暗らい戸の外に久らくボンヤリとして佇んで居るのであつた。

——小笠原　貞——

# 樹下闇

企業を會す樹下闇の庭鳩も居て、
綸絹張る君樹下闇に禪釋も、
習作の畫蚊遣の君に野心あり、
違例大漁梅雨の濱に干鰯せる、
尙解けぬ心に鮎の遊舟や、
洲の水村地產を分つ段の富、
波の下駄追ひし砂丘畫貌の、

——鈷　高——



Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

救はれし千髮切りしてふ夏座敷、
探しあてし江の一舟葭の晴、
葭切に湖畔風呂人參の効驗や、
儕餘食まず龍門の策を避暑の地に、
更けて叩く即興も都人や蚊遣たく

——白雨——



Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

# 「ルーヂン」を弔ふ

人生の筋書を無理にこぢつけて心中立てを迫られた氣障なイプセンお爺さんの側に居るとたゞさへ峻烈な寒氣にこゞえ上るスカンヂナビアの空氣が理もなうわびしうなつて來るのに引きかへて黑土地帶の大平原の眞中に育つた巨人ツルゲネーフの豐醇な情調や宏恢な人生觀や穩當な然も深刻な觀照それ等に觸れて來ると柔い薄桃な女の肉に醉はされる男の樣に如何に快い響を與へるであろうか。綽々として餘裕の有る藝術に游いで私達のイマジネーションの世界を不毛の乾坤に築くことを許して呉れる樣なそんな寛大な藝術家が此廣い廣い世界にたんとは無いことを悲しみ度い。

身を浮草の根を絶えて水のまに〳〵誘はるゝ佳人が運命も奇しいがこれは凄々たる落魄のさしも天賦の才と該博な知識とを以てして遂に世に容れられず百敗地に塗れて無慘廢退の髑髏と化し去つた彼ルーヂンが生涯よ。

渇仰と敬慕とに輝く眼を以て喜び迎へられた彼が僅に二ケ月ならずしてすご〳〵と冷笑の中に見送られねばならなくなつた不首尾はそも何が故であつたか常に二三子に崇拜せられながら幾何ならずして嘲罵を以て酬いられるのは何がためであつたか滔々幾萬言青春の血を絞殺し盡す雄辯は遂に無稽の

誇言として冷かな謗りを浴せかけられるのは何が故て有つたか。

人さへ見れば直ちに持論を主張する議論を吹きかける何だか薄つぺらな感じもする口數の少いのが重々しい男らしい男の樣に慣されて來た人々には何だかいやな心持を與へてなつかしみ有難味がなさすぎる、その言ふ所は自ら眞理だ眞理だと呼號するにも係らず現實に打つ突かつて來ると急ち其信仰は醒されて了ふ、一人去り二人去なのも無理はない、思つても居ない女を迷はしたりしてをいてイザとなつて逃げて行く卑怯な薄情な男、何か事業を企てゝもそれを耐久して行かうともせず、いつも失敗の歴史はかりを重ねて然も運命だとして觀じてをる浮草の樣な彼が生涯、あゝ彼は果して輕薄兒であつたろうか、空想から空想を追及する煙の樣な人であつたろうか。莫邁私は彼に向つて滿腔の熱淚が濺ぎ度い。馬車馬はたゞ一途に向をむいて驅けて行く、なぜそんな眼匿しを篏めてあるのだろらか、忙しい世の中に右を見左を眄りみて居たならば口が萎れて了ふ、世間には隨分此馬車馬が多い否原始時代の人間には限かくしなんぞする必要はなかつた。白と黑と二つを比較して其色を鑑定することはいと易いことである、思想の單純な知識の幼稚な時代の人間の眼には世の中の現象が簡單に映じて來るから何の雜作もなく識別することが出來る、其處に何の疑惑が與ろうか、何の煩悶が湧いて來ようか頑愚とか反省とか云ふことはそれ等の人々には全く不用な宣言に過ぎない、今日の文明の中に知識と云ふ大海に投げ込まれて生れて來た人々は幸か不幸か森羅萬象の參差たる色彩が千種萬様に映じて來ても簡單な識別に安じ幼稚な觀察に甘ずることは出來ぬ、眼まぐるしい眼匿しなぞ何時までも篏

めて居られようか、出て丶益微細な官能を滿足させることを喜ぶ人々にあの馬鹿らしい間の抜けた盆踊や能狂言がもしも歴史と云ふ青苔をとり去つたなら、過去の藝術器と云ふ錆を洗ひ流して了つたなら何うして眞面目な貌で見て居られようか、若も人生に忠實な人で有つたなら其犀微な眼は必ずや物の隅々事の端々にまで鋭く注がれるて有ろう、之を採り彼を捨つる前に具に「物の心」を洞察し來つた時に若も公平な人生鑑賞者てあつたなら其是非選擇をいかにするて有ろうか、眞理は何處に見出されるて有ろうか、普遍性の眞理と云ふものが果して存在してをるてあろうか、果斷決行と云ふことは馬車馬的の人間に限つてはゐまいか、てなくば觀照の溺愛者てある、成り行は全く行き當りばつたり時誼に投ずればそれが眞理となり齟齬すればそれが悖理と觀ずる外はない、そこに運命と云ふ詞が必要になつて來る、

ルーヂンは智慧者て有つて常に物の二面を視、事の兩端を省察した、彼は詩人て有つて有ゆる「物の心」に哀を知つてをつた。彼は先覺者てあつて時代思潮に一歩を拔いてをつた、彼は無差別の境に立脚して居ながら猶唯一の眞理の存することを確信して絶えずそれを追及した、彼が眞理に對する熱愛心は迸つて雄辯となり事業となり頓挫して失敗となつた、彼が眞理と認むる所は現實の社會に適用して來ると破れて了ふ、彼の理想を容れるべく餘りに未だ進てはゐない、破れると彼は直に己れの持物が眞理ではなかつたと悟つて了つて更に次の眞理を探し求める、彼は餘りに無抵抗て有つた、信念に對する執着力が餘りに淡々として水の様て有つた、今一歩彼が其執着に努力を加へたならば少くも逐

行の端緒を得たて有ろう。

彼の議論が人をチャームし、常に何人かに崇拜せられたのはその主張する所が全く彼の肺肝から出る熱誠てあつて其眞劍な態度に根强い人を動す力が有つたのである。何しろ普遍的眞理を追求するに急であつて一の私心がない頑冥な分子は彼には到底見出すことは出來ない、ダーリアの家に來て最初に皷吹した「犧牲」の精神は決して虛言空辭ではなくて彼の畢世の事業で有つたので有ろう、無執着から起る失敗、餘りに無私から與る不成功を以て直に口先きばかりの……と評するのは酷て有つて實は彼れ程實行に忠實な人はなかつたのである、彼にしては成功せない議論も他の野心家が試みたならば或は着々功を奏したことで有ろう、彼の理論は屢々該切であつて肯綮を穿つてをる、これ彼が人を魔する所以であつた、然も彼の思想の多岐と無執着とは容易に彼を失敗せしめた、これ目先の犀利な輩をして譏然嘲罵を以て彼を去らしめた所以て有つた、彼は度々人に向つて惡意のないことを辯解してをるのは全く僞のない至心であつたろう、彼は個人の利害を考へる前に社會の禍福を考へた、四辻に立つて四方を見た、何れも捨て難い、躊躇する、自然の推移を待つ、抛擲する、と云ふ圖取りになつて來る、理想が先きに立つて現實に能れると破碎されて行く。現實と云ふ恐しい力が彼の夢幻を一つ一つ打壞して行く、彼は彼自身の智に迷はざるを得なかつた、ナターリアに對する態度を評して見れば初め彼はナターリアのあの色の淺黑くて怜悧な性格にチャームせられてから何とはなしに好奇心に驅られて研究的に近づいたに過ぎないて戀の愛のと名のつく樣な情緒には陷つてゐなかつたらしい、それも其

議などは豫想しなかつた、從てそんな障碍の起つた時の覺悟なんかも考へてはゐない、ナターリアの熱情にただもう胸が沸々して上氣して了つてゐた、それでこそ後になつて考へて見たならば馬鹿げてをる様な行動をも無意識的にした。時局が險惡になつて來た時に勿論ルーヂンはそれに反抗して戀を成立させ様なんかは寸分考もしない。ルーヂンは客觀的條件が承認せられない場合にはいつも主觀を抛つて來た、今母親の承諾しない娘を無理に連れ出して逃げた所で第一生活にも困る、社會の制裁をも受けねばならぬ個人の滿足を買はんがために他を犧牲にすることはルーヂンには忍ばれないで有ろう、そんなにして連れ出した處でナターリアに取つては決して幸福でないことも明であり、自分自身にも快いことはない。彼の主義が「犧牲」に在る以上はそんな一個の歡樂のために社會を忘れることは出來ない、社會のためには自己の歡樂を犧牲にせねばならなかつた、彼には何の困難をも感ぜずに行ひ得る場合のみ眞理であつた、他を省ると云ふこと、因習を思ふと云ふことも例へば骨董品を珍重がる様な意味で、自覺して見て來る日には中々趣味が有る、自覺して因習を追つて行くことは其忍從の中に新しい意味が見出される。征服にも味がある様に屈從にも味が有る、人間には此二面の味が味ひ得る様に思はれる、二者の一を取る時に情意に勝つた人は其一を自ら破壞する。智に勝つた人は懷疑に陷つて逡巡する、ルーヂンは斯る場合にはいつも解決を「自然の推移」に求めた、自己を捨てて「自然の力」「現實の力」に服從した。それも面白い、破壞されて行く理想の後姿を見送つて悄然としてをる、自我を押し通すことのみを喜ぶのは未だ人生に忠實ではあるまい、肉を削られる様な血を絞り取



Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

識などは豫想しなかつた、從てそんな障碍の起つた時の覺悟なんかも考へてはゐない、ナターリアの熱情にただもう胸が沸々して上氣して了つてゐた、それでこそ後になつて考へて見たならば馬鹿げてをる樣な行動をも無意識的にした。時局が險惡になつて來た時に勿論ルーヂンはそれに反抗して戀を成立させ樣なんかは寸分考もしない。ルーヂンは客觀的條件が承認せられない場合にはいつも主觀を抛つて來た、今母親の承諾しない娘を無理に連れ出して逃げた所で第一生活にも困る、社會の制裁をも受けねばならぬ個人の滿足を買はんがために他を犧牲にすることはルーヂンには忍ばれないで有ろう、そんなにして連れ出した處でナターリアに取つては決して幸福でないことも明であり、自分自身にも快いことはない。彼の主義が「犧牲」に在る以上はそんな一個の歡樂のために社會を忘れることは出來ない、社會のためには自己の歡樂を犧牲にせねばならなかつた、彼には何の困難をも感ぜずに行ひ得る場合のみ眞理であつた、他を省ると云ふこと、因習を思ふと云ふことも例へば骨董品を珍重がる樣な意味で、自覺して見て來る日には中々趣味が有る、自覺して因習を追つて行くことは其忍從の中に新しい意味が見出される。征服にも味がある樣に屈從にも味が有る、人間には此二面の味が味ひ得る樣に思はれる、二者の一を取る時に情意に勝つた人は其一を自ら破壞する。智に勝つた人は懷疑に陷つて逡巡する、ルーヂンは斯る場合にはいつも解決を「自然の推移」に求めた、自己を捨てて「自然の力」「現實の力」に服從した。それも面白い、破壞されて行く理想の後姿を見送つて悄然としてをる、自我を押し通すことのみを喜ぶのは未だ人生に忠實ではあるまい、肉を削られる樣な血を絞り取

られる様な因習の縄にぢつと怺へてかかつて行く時の心持、自分の情緒の荒ぶれを息を凝らす様に抑鎮める時の心持は一種のむづ痒い様な勝利とほゝ笑みとを禁じ得ないであらう。破壊する心持は其刹那には竹を破つた様なサラリとしたものであるけれど、其次の瞬間には洪水の後の様な一種物足りない力抜けのした空虚が押寄つて來る。自覺的に忍從した後は彼に一歩を輸したことが何ものか他に要求することを許される様な希望の充實或は道德的の慰藉を覺えることが有る、そんな事は實際果敢ないことに過ぎないかも知れぬが、ルージンは斯うした心持で常に讓歩して讓歩しては更に又新らしい方面に何かを探し求めて行つた様な氣がする、彼は戀愛それ自身が自分の支へとなつて、それが社會に貢献する所となる場合にのみ認め得たで有ろう。戀愛を捨てることは彼に何の雜作もない實は自分が眞に女を戀つてをつたか何うだかさへ疑つた、彼はかくて人間の一番弱い戀愛にさへ沒頭することは出來なかつた、かれ自ら薄情なのではないかとも疑つて見たけれど、決してそうではなくて水の流れに送られて行く様に、眞理から眞理を追及して遂に一事に執着することが出來なかつたに過ぎない。

智にきくものはいつも疑に陥つて足下が覺束ない、知識に中毒した彼は知をむしろ呪つたかも知れない、「人の境涯は狹く單純ながいゝ」と云つたのも身につまされた言ではあるまいか、朝に南海の游子夕に北冥の客となつた彼は懐に半文の貯もなく、一生を放浪の間に送つた、追及から追及を迫つて終に同盟軍に投じて社會の犠牲となつた彼は、げにも廉潔である。而して一度も世を憤り人を恨むことをせなかつた。丁度玉突の玉が突かれ突かれて其自然の勢に轉々する様な生涯には意地もなければ反抗も

ない、腹の底から正直な無邪氣な大きな赤坊、人は之を薄志弱行と嗤ふかも知れぬが、誰か彼の如く歡樂を捨てゝ眞理に忠實なものが有つたろうか、彼は有ゆる色彩に眼を注いた無私な詩人で有つた。然し四辻に立つて一つの進路を選ぶ時に他の三を割愛せねば何時までも岐路に彷徨するの外はない。素絹を拗げて之を染むる時限りなき色彩のすべてに愛着したならば永劫に素絹でをかねばならぬ。博愛主義を奉ずるものは零である、」と云つたのは這般の消息を意味してをる。

混沌として歸趨を知らぬ現代の思想界に漂はされてをる現代の友よ誰か浮草でないものが有ろうか、作者の假り來つたルーヂンは此過渡時代に於ける思想界の表象ではあるまいか、曰く文明の輸入曰く國粹保存、曰く文藝奬勵、曰く發賣禁止、女學生に洋裝させるかと思ふと忽ちお大皷に桃割と後戻りをした時代もあつた。國民教育に於て忠君愛國を鼓吹してをると一方に無政府主義が起る。學校では貞淑なれ温順なれと教へられてをる少女が新聞雜誌をのぞいて見ると操行點が丙か戊位のつきそうな女に「新しい」とか「才媛」とかと持上げて褒めたのか貶したのか解らない樣な記事が出る。一代に巨萬の富を積み上げた體のいゝ大泥棒や、風雲に乘じて巧に槐門に列した策士權臣を目撃してをる青年に正直のヘチマと說諭して見た所で誰が首肯するものぞ。名に就かうか利に走らうか、將又義に則ろうか、結局迷はざるを得ない現代の風潮を何うすればいゝか。舊來の道德律や習慣で眼かくしをさせ樣としても今時の野馬は到底それを肯じない。殊に女性に對する態度の曖昧さ加減に至つては言語同斷ではなかろうか、「良妻賢母」「理想的婦人」如何にも其言葉は美しい立派であるが、其内容は何う

であらう、如何なる婦人が良妻であるか、如何なる女性が理想に近いか、甲の是とする所は必ずしも乙に喜ばれるとは限らない、千紫萬紅の個性をたつた一つの型に容れてたゞ一途に貞淑なれ臺所に忠實なれと強いて其結果が何うなるか。未だ十五や十六の少女――讀みかきさへもどかしい――に「夫に仕ふる心得」「育兒法」「家計簿記法」も滑稽ではないか。彼等が何のために學校に通つてをるかさへも自覺してゐないのも無理はない。こんな主義の下に教育せられた、女性が廿歳になるかならぬに家を持つた時に何事が出來るか、現在の妻と云ふ地位に在る女性を見渡したならば思ひ半に過ぐるで有らう。一個の存在物として如何程の價値が有るか、人生と云ふ大海に漂ふて如何程の自覺を持つことが出來るか。

男には自由な天地が開けてをる、男の世界は廣い、男の言論は自在である、憂憤をも不平をも訴へたり慰めたりする機關は皆く備つてをる。小い家庭內に女子供を對手にして跼蹐居らざるも好いたことをしてよい樣に習慣がさせて來た。みるに悲哉女には女の世界別天地は久しい間決して開けてはゐなかつた、封建時代の遮斷主義のハウスの中に閉ぢ込められて女同志であつてさへ互に心の底を暴露して眞の僞らざる聲を敲いて見る等の機會も自由も與へられてはゐなかつた。賢婦人は決してそんな家や夫に對する不平を人に洩らすものではないとなつてゐた。同じ人間とは云ひ條其幸に黑白の差異があつたのである、げにも哀むべき一小蟲の如きものに過ぎなかつた。然し一尺の身體にも五寸の魂、何で女だとて人生の歡樂も悲哀も苦痛も感じないで居られよう。內に漲る悶々の聲、不平の叫は

今や世界の隅々から興つて來た、婦人開放婦人職業問題皆新しい義務の責任の聲であると云つた所で若しもそれが心服することの出來ぬ事柄で有つて見れば畢竟虛僞の行爲に過ぎない、男裝の女權擴張運動者が出て來た。家や夫を捨てゝ飛び出すお轉婆も出て來た。父の命令をもだし男を罵倒して舞臺に跳ねまはる氣儘娘も澤山出來て來た。勸工場の陳列品の様に種々のモデルを見せ付けられては柔い思想の芽は何う伸びていゝかも解らなくなる。女性の自覺を呪ふ人。面白半分に煽て立げる人、個人の思想にも生活にも撞着の多いことは濁流に捽してる現代人に免れぬことで有ろう。如何に國家が正氣になつて文藝の取締をしたり教育者を督勵して見たりした所で現實の大勢を何うすることも出來ぬ。教育者自身實は方向を失つて居るのではないか。無理にでも歩いて行くためには善かれ惡かれ方面を定めねばならぬ今の處其方面を定める者は文部省より外にはない筈になつてをる。然も因循姑息な掟に盲從して行かねばならぬ女子教育者の心事も氣の毒なものである。社會の大勢はとにかく行く處まで行かねば止まない、岐路に彷徨してをる現代人にはもはや馬車馬にもなり得ない。女性の覺醒の果して吾々女性を幸するか否かも解らぬ、家を飛出すのが强ち惡いこととも思へぬ。小羊の様に素直なのが善いこととも思へぬ。吾々を導くものはたゞ現實の成行きで有る、七轉八倒の曉には何處かの渚に漂着するで有ろう、來るべき次代の新運命はむしろ斯様な渾純裡に胚胎してをるので有ろう。浮草の様なルーヂンの生涯は遂に新機運を開くべきための犠牲となつた。

王様（スカンヂナヸアの）が「人の身も猶此小禽の如し暗黑を出てて暗黑へ行く、温い明い所にをるの



Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

は束の間て有る」と云ふと家來の中でも一番年嵩が「小禽は暗黒の中に消えてなくなりはいたしません矢張り自分の巣を探出すことで御座います」と云ふた……成程人の一生は短い果敢ないものですが併し人を經て總への大業が成就する、其神力の器となつてをると思へば人間の歡樂など顧みるに足らぬ、死の中にも生はあつて自分の巣は見出せます……」

彼の信念で有つた、我樗牛子は「吾輩は須く現代に超越すべし、」とか「永生」とかを說いた、五里霧中にさ迷ふてをる現代人の模糊たる努力、試みが何等かは新しい萠芽を出すのを豫想して悩ましい然し力強い「生の現實味」に滿足して瞑せねばならぬ。

朝三暮四殆ど毀譽褒貶に遑のない渦巻の中に在りながらルーヂンが何時も綽々として其思想界の犧牲となつて苦悶もせず雜作もなく薄命な人生の大海を漕ぎ破つて行つた裕然たる態度無私公平な胸奥が何となく偉大な感を與へる。餘裕のある大膽の文學か斯る迫らない人格を描かしめたのであろう。

——上　野　葉——

# 帝國劇場の六月女優劇を見る。

ビヨルンソン原作
小山内薫氏譯
新夫婦

「新夫婦」の筋書に。
「第一幕田舍にある長官の邸」幕開くと御料長官と婿のアクセルは新聞を讀み母は縫物をして居る處へ娘のロオラ出來り朝の挨拶をなす。母は昨夜より咳屢々出づるは陽氣の悪い故なれば今夜の舞踏會は斷りたいと云ふ。娘はそれなれば私も中止さうと云ふ。アリセルは此舞踏會は親友達が吾々の爲めに特に開いて呉れたものなれば斷るのも如何と兩親に續いて食堂に入らんとするロオラを引留めて、お前丈は是非とも行つて呉れと頼めども娘の心には先づ父母あつて後の夫と云ふ念厚し。如何に父母の懐子なればとて、結婚して了へば自然兩親を捨てて我が方へ來るものとのみ思ひ居たるアクセルは、ロオラの眞に己を愛し居らざるを知り、ロオラの友人にて嘗て心をアクセルに寄せたるも、顧みられざるを知り、此家に寄寓せるを幸に我が戀を犠牲となしアリセルとロオラの間に立ちて調停の勞を取らんとするマチルてを捉へ心中の煩悶を訴ふれば、マチルは己の愛を汲取らざる男の此有樣を反て小氣味宜しと思ひ、故意と冷淡なる態度を裝ふを以て、アクセルは益々亢奮して踊り狂ふ處へ皆々出來り其仔細を尋ぬるよりアクセルは我我の結婚には要素たる愛なければ幸福ならず



Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

ロオラは只兩親の爲めに生きるを知つて我在るを知らず、此儘兩親の側に置く時は、自分は終世ロオラの愛を得難かる可く、斯くては畢竟自他の不幸なれば、若しロオラにして貞淑なる妻とならんとするならば、此家を出でざる可からずと主張す。老夫婦は一粒種の娘なれば手放すまじとは思へども、婿の主張する處一應道理あれば遂に其乞に任す。」

第一幕の光線が厚味が有る樣に思へた。暑くるしそうな色が、透き通つた朝の光、色とは思へなかつた。もう少し室の外から風のよく通りそうな所、光線が通る所が有るように思へさせて欲しかつた。ぎりぎりの空氣と光線は、ああした劇に最も不必要な、そして邪魔つけなものだと思ふ。

最初に見へたのは初瀬浪子のロオラだつた。私は、大變に、きれいなそして聲のいゝ可愛い人だとすぐ思つてしまつた。いかにも兩親を大切に、何事も父有りて、母在りて後の夫とアクセルに思はさすだけ、それだけ充分に價値の有る演じぶりだと思ふ。あの若々しい聲は遂々、私の忘れる事の出來ないものの一つになつた。

私は初瀬浪子を初めて見た。そして帝劇の女優中一番應用のきく、そして華々しい人だと思つた。いかにも子供な兩親の懷つ子のようなあのロオラ、私がアクセルなら全くアクセル以上、早く兩親にロオラと別居説を申出したであらう。衣物の色と、ロオラの眼の光りが一所に動いてロオラの肉體は軟かく、軟かく見えてゐた。

只、高潮に達した時もう少し強く、もう少し激しく、ぶつかつてくれたならと、松井氏の高潮しき

つた色を、塗つて見たかつた。
それから、ロオラの髮が最う少し線がかつたら（僞にても）全く、ロオラの色彩に於て申分がないと思つた。カツラの作り方も眞中を分けるとしたところて、あんなハツキリと白線を引いた樣に見えない事を、望む。あれが如何にも日本ぢみて全く別離れがしてゐた。

初瀨浪子の藝を私に我儘に云はせてしまへば「夕燒けの時」と答へて置く。

自由劇場にても文藝協會にても、又土曜劇場でも、役不足の場合に、もし帝劇から人選するならば私は初瀨浪子をとお答へして置こう。

澤村宗之助のアクセルは、身體全體の色彩に於て全く成功してゐると思ふ。場面全體をいがみなく組合して行く人だ。見た外國人と云ふ氣持がよく見へた。顔の作りも、手と足の働かせ樣も、全く上手に動いてゐた。音調もいゝ。けれど二幕通じて、聲がどうかすると舞臺から外に逃げ出しそうに思へてならなかつた。音調だけをも少しだけ「攝養」して欲しい。

目の動かし方と指先きの動き方が全く自然に動いてゐるのに驚いた。

幕の閉ぢるまて自然的に（音調てこわしかけるが）動いてゐたのは、丁度浪子の、終り迄、可愛い小娘と思はせられたのと一緒だつた。

河村菊枝のロオラの友人マチルデは、文藝協會の公演、「人形の家」のリンデン夫人を思はずにおられなかつた。



Digitized by Google
Original from UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

身體のこなしから。目と口の動かし方から、音聲から、マチルデその人の筋から。只しまい迄リンデン夫人と引合せて見てしまつた。

涙子のロオラが可愛ゆく、厭味なく出來たのにひきかへて、處々に厭味がのぞきかけるのが不快だつた。けれども涙子より、たしかに年が多い樣に思はせる演じ方を時々出して藝そのもので助けて行つていた。

澤村國十郎の御料局長官は、原作者が見たらあんまり小さくて、みすぼらしいので驚きやしないかと、いらぬ心配をして見てゐた。

もう少し品が有つて、大きさが添つてくれたならとも考へ直して見た。けれど年寄りくさくは見へてゐた。服裝の色彩は、少し色が散らばり過ぎてはゐないかと思ふ。

田中勝代の妻は、あとから出てくる喜劇「出來ない相談」の洋服姿の糸子のように、ともすると自分の年が出たがつて、ロオラを産むだ母と云ふ年を忘れて、よく若い聲を出してゐた。

後、よつぽど勉强しなけりやと思つた。非常にふけ役はむつかしいだろうが。やつぱりいくら若くても「注意」と云ふ事。絶へず自分の役に凡てを集中しなけりやいけない。あとは目ざわりの處があんまりない樣だつた。

第二幕「一年後アクセルの住居」娘はテーブルの前に縫物をなしマチルデは長椅子に腰を掛け新夫婦と云ふ小說中よりアクセル夫婦の間柄に似通へる點を拔きて高らかに讀上ぐればロオラは夫は吾

等の身の上と同様なりと冷淡なる夫婦關係を打明け其の分別を借る。依てマチルデは自己の情を製して雙方の慰藉者となり兩親に此家を訪はしめアクセルをして再び娘を奪はれまいとして、更に其熱誠を増さしめ、一方己とアクセルとの間柄を疑はしめてロォラの嫉妬を起さしめ、之に依つて始めて夫に對するロォラの愛を起さしめ、首尾よく兩人の仲を調停し己は老夫婦に從つて伊太利亞に出發する事となる。

登場人名は第一幕と同じだ。けれど町の家、絶えずさわがしい町の家と云ふことが場面一ぱいに出てゐたことが喜しかつた。

ロォラもアクセルも第一幕より少し不自然な仕草を見せたことが氣にかゝつてゐる。

ロォラが縫物をしてゐる場所が非常にゐゝ、位置が好いと云ふのか。けれどマチルデがそれを時々こはして歩むので憎らしく思つた。

この幕でも初瀬浪子の出來ばへを賞めたくて仕方がない。

母親の聲が第一幕目よりも一層キンキンして大變に若過ぎてゐた。あれぢや全く打こわし方の上手な人と云いたかつた。

ロォラに手紙を持つて來た下女橘富美子の色彩が目に立つて美くしかつた。ともすると、一寸の間だつたがロォラの色を横取りしそうだつた。身體の調子が馬鹿によく出來た。けれどももう少し落付きが欲しかつた。



Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

四人そろつてセリーを飲む時の手つきが全くよく出來てゐた酒が酒とすぐ直覺に來たのもあの上手な手つきで成功したらしい。

藝本位で評すると宗の助のアクセルを擧げて氣持本位で評すると、やつぱり浪子のロオラを取つて置く。

私は、初瀬浪子の健全な生立ちを祈つて置こう。

## 萬年草　二幕

近松原作
岡本綺堂脚色

新夫婦を見て廿分間おいて、世話劇を見る

初めから終りまで無理のちつともない、筋の立つた解り易い處がやつぱりとうなづかせる。なつこい、うまみ、深さ、しめりこれらの味の出るのは大和魂かしらないが、やつぱり時代物に有ると思つた。

「序幕高野山麓紙屋雜賀屋店先の場」

あんまり淋しい店だと思つた。紙が少しばかり列べて有るつきり、あれて紙屋の雜賀屋店先きを見せるとは少し薄つ片らだつた。

けれど不自然な事を、どうしてもやらなければ踊りの出來ない舊劇、黒ん坊が又しても飛出して、置く可き筈の、動く道理のない物を、どしどし演じ方の都合上、搬び動かす以上、仕方もないが。もう少し紙屋らしく、奥行がほしかつた。



Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

夕暮とは思へた。けれど店先きと表二階の光線がともすると同じになるのは、どうだつたか。

高野諧が出て來て入る迄の物騷しさ、ガヤガヤとして、全く邪魔つけだつた。こんな事は、女優諸氏が「小さい、は役」と思つて自分を散じて、そして空ろの蟬のようになつて演じるからだろう。馬の足になつても、役そのものに極めて忠實にそして眞自目で有つて欲しい。もし高野諧での人が一人一人、役から離れてゐなけりや、どんなに心持よく見られただろうと考へる。

序幕で一番透々と演じてゐたのは澤村長十郎の飛脚屋九兵衛。きつけから、顏の作り方を、長十郎自身の氣持てよく生してゐた。舞臺の邪魔物とならず、時々隱れた處で光つて見せてゐる。尾上菊四郎の雜賀屋與次右衛門は、どこがどうと云ふことの上手さを持つて心持よげに演じてゐた。お娘の祝言も愈々今夜と取極めたと云ふことを女房や小娘手代に告げる處の性急さは、わざとらしい。もう少し不自然の點をどうにかやつて欲しかつた。

然し變作が出て來て後の呼吸は、全く上出來、幕の閉りる迄感心させられた。

藤間房子の女房およ。は役を殺さず上手に生かしてゐた。色の好みは、もう一度位ひ考へ直して欲しい。顏は時々面白い線が出たがつてゐたが、あれがあの人のくせだろうか。あの筋が出ると大變に顏面が暗くなつて來る、隱せるだけ。出來るだけ顏の筋の動かし方に注意がほしい。無理な小細工、分に應じない。動かし方は、全くいけない。又演者その人の爲めにも損だと思ふ。久米の助とお梅を逃がす時。闇がりになつてからの房子は、上出來だつた。自分と役をピッタリ合して行く事をいつもい

つも考へるところ迄も研究的體度でやつて、そして可憐で美くしく見せたのは鈴木徳子のお梅、音調もいいお梅には全くあつらへむきの人だと思ふ。序幕ぢや少し情合が乏しい様だつた。もう少しもう少しと思せてゐたが、或はそれがよかつたのかも知れない。赤い色で全き色彩をしてゐたのは、役の上から非常に引立つた、とにかく簪から、どんな隠れた處の色にでも役をすぐ呑み込ますだけの力を持たせて有つたのが嬉しかつた。初瀬浪子の次に置きたい演じぶりだと、つけたして置く。

宗之助の高野山の小姓久米の助の衣物が小姓だとすぐに思せて呉れた。殊に袴の色と淺黄の裏色がよく合つて、小姓の顔を明るく見せてゐた。お梅より送られた文の行違ひから女犯の罪現はれてお山を追拂はれて途方に暮れての打萎れ方を、ずつと通して忘れなかつた事は役の上から、苦しかつただらうと同情して見る。「新夫婦」のアクセルの時の音聲が時々飛出しかけるがすぐ消へた。私は頭の働きより今度の萬年草での宗之助は技巧のたしかの人と感じた。澤村國の助の京の紙屋作右衛はどうやらすると江戸つ兒らしい處が出かける。役の上からは決して惡い演じ方でもなかつた。あの舞臺であれつ位ひの體を持つた人ばかりが、芝居をやつたらいいのにと思つた。

宇治龍子の下女お夏は神妙な働きぶりを見せた、他のこまこました無くてもがなの人達から離れていゝ落着の有る、調子を有つてゐる人だ、眞面目に眞面目にと勉強大切を御敎へ申して置く。帝劇の女優として、可成り望をもつてもゐいんだと思ふ。

「二幕目高野山中腹女人堂の場」

今迄私の見た芝居でこんなよく出來た、本當らしい光線を見た事がなかつた。

幕の開くと同時に私は驚いた。空氣の有るそして冷たさもうるほひも、凡て實物と同じだつた。女人堂の後手、手洗場の裏手なんかは、まるつきり眞景といつてもいい。夕方少し遲く上野の兩大師から入つた時と同じだ。その光線の度合があれたけの物が。どんな場合にも適要されたら演者も又觀客も、どんなに易くなるだらうと思つた。とにかく、光線から、空氣、色、それらの流れのいゝ事を賞めて置きたい。

二幕目で聞こへる音と響き、鳴り物は、どれもこれも、舞臺に引込むたけの力が有つた。高野の山奥に一晩でも泊つた覺への有る自分には、全くそれと似通ふた點を思はずにゐられなかつた。鳥の聲と夜行の木鐘の音はあれだけの廣さにしつかりと、浸めり込む程だつた。あの夜行の鐘は、成巧した、音だつた、響きだつた。建物は、女人堂も、手洗場も、よく調和されてゐた、殊に女人堂の内の光線が强くて氣持がいい。建物にみんな陰が出來てそして出て來る人物が浮出してゐたのが、外で見る事の出來ない心持のいゝ芝居だつた。村田嘉久子の久米之助姉おさつは、あれだけ身體をよく働かせたものだと感じさせられた。どこ迄も、あれつきりの場所より、他に走らない。見てあぶな氣のない演じ方だと思ふ。弟を思ふ姉として、私は、只、理もなく感心してゐたばかり。久米之助が案内を乞ふた時、堂の眞暗の中から出て來る時の形と、萬年草を、流れに浸して、弟の身上の吉凶を占ひ凶と出た時に心を痛める形が、うまみの有る、重々しさを持つてゐた。ここに出て來る久米の助とお梅は、序



Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

幕の時より、呼吸が合つてゐる樣に思へた。家を離れた後のお梅の形は久米の助を想ふ情かはつきり見へて來て、嬉しかつた。

三人が渦巻しながら幕の中に消へたやうに思へた。無理のない、そして熱い情の走り廻つてる幕だつた。おさつが久米の助とお梅と心中した事を聞き、泣き悲しみながら、堂の裏手に、九兵衛と供男につれられて行く處で幕を閉めたのが馬鹿に氣に入つた。供男の重藏が持つて出たたいまつと九兵衛が持つた提灯の明りは、舞臺から外に飛出してゐた。仕樣がない事だが「淨瑠璃」と「三味線」坐り場所が、どんな場合でも舞臺の凡てを打破るのだ。あれだけは、目につかない樣、邪魔にならない方作者と役者と相談してやつて、ほしい。

それについて私は、こんな事を思ひ出した。この間の文藝協會私演の舞踊劇「歌麿の女」と「北齋の鍾馗」を見た時、今云つた樣な點に於て、全き注意と用意が有つたことを。私はその時も日本の芝居に、これだけの注意と用意が有つたならと。あの舞踊劇を見た人は、きつと私と同じ考へを有つて下さる筈だと思ふ。とにかく、黑ん坊と、あの淨瑠璃と三味線の置き場は、一考を願ふて置く。

そして出來るならば、芝居の色と一所に塗り込むで置いてほしい。全く別にして置くものぢやないと思ふ。

二幕通して、「萬年草」はとにかく無難な芝居で、そして演じ方がどれもこれも、もう一息と思はさす處が多かつた、それだけに面白味が有つた樣に思へる。



Digitized by Google
Original from UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

松居松葉氏新作

# 歌劇 釋迦 三場

序樂ですつかり醉つた私は、歌劇が始つてからだんだん醉ひが覺めかけた。序樂は月夜、靜かなムウーンナイトを形容するテームは流暢な緩漫な弦樂四部に初まつて、フリユート、クラリオネツト、ホルン、オーボーエ、が順々と加味して、全管弦樂になつた。そして暗い氣分を少したどりかけてゐると管弦樂は元の弦樂四部に返へりながら幕が上つた。天竺憍薩位國迦毘羅城の庭園で右手の隅に大理石で造られた五色の紋様の有る樓が有つた。それだけは、如何にも天竺憍薩位國かとも思へるし印度くさくとも思へた。けれどヒラマカ山もロヒス河も、まるつきり、印度と別々で無關係のものだつた。もつと熱帶性の植物を、あすこに出したらば、或はと思へたかも知れないが。とにかく、熱帶國の夜とは見へない。月下に語る釋迦の妻、柴田環氏の耶輸多羅と松本銀杏氏の羅睺羅は外國渡りの曲藝師のような、色彩を持つてゐた。けれど、環氏の獨歌は見事なものだつた。腰の動かし方があんまり面白くない爲めに、切角の美くしい幻も消へかゝりそうになるのが口惜しかつた。

後から大勢出場の場合に、どうしても、耶輸陀羅の服裝が芝居ぢみて、日本の乙姫くさい。髮飾りが赤過ぎたのだろう。もつと、いゝ、高貴な衣裝をきせてあげたかつた。

あれぢや身體の隅々迄、あんまりピツタリコになりすぎて、溜るみ、も餘悠も甘味も全く見へない。ああした時は、どうしたつて、衣裝で倍は成功を助けるから。もつと「流れ」と云ふ氣分が欲しい、行

つまりのしない樣な。

耶輸陀羅のみぢやない、舞姫が皆そうだつた。どこ迄も日本の龍宮式で面白味も深さも全く見出す事が出來ない。目の光りと動かし方に注意をしてゐたのは、環氏と清水金太郎氏の二人だつた。後の人は、誰もかれも、みな目の光りを散らしてゐた。即ち心と藝が別物になつてしまつてゐるのだ、舞姫の內の一人でも全く身體全部に心と藝をヒッタリ合せてゐた人が有つたか。あれだけ澤山出た人は、皆、只無意味に舞臺迄搬ばれ、無意味に敎へられた通りに花をまき、口を動かしただけだろうと思ふ。そんな不忠實な事では、とても自分の身が立てないと心配して上げたくなつた。又繰返へす樣だが假へどんな端役でもどこ迄も「自分」として作なはなけりや、いけない。上等な、そして、しばへの有る役でなけりや自分の眞の働き、眞の氣持、生きた動きが出ないようならば、歌劇部から身を引くべしだと思ふ。あゝした不忠實の內から、どうして、日本としての代表者が得られよう。

淸水金太郎氏の提婆達多は、よく、とゝのつた形を有つて、そして無理の少しもない、樂そうなやり方だつた。私はどうしても此の劇で一番成功に近い人だと思ふ。紅い薄絹はもう少し餘悠が有つて來れたなら、もつと身體が樂に動かせただろうと思ふ、色彩をされた、皮膚と、あの紅い薄絹が大變肉を堅く、そして、强そうに見せてゐた。次低音(バリトン)はあの場面、最も、とくな立場で有つた。環氏の高音(ソプラノ)と一所に、劇場を出てもひしひしと、追かけて來そうな氣分になつた。

提婆達多退場して耶輸陀羅が地に倒れてから管弦樂が俄に急調となつて、隨分、騒がしい音がした

光線が變ると一所に薄い絹を張つた內に、菩提樹下に淨輓艸を馭いて結伽趺座する釋迦牟尼佛を見せた。あれて釋迦に見せて濟ました帝劇の歌劇部の人達の大膽さと、そして、決斷力のいゝ勇氣の有るのに全く一本まいつてしまつた。

結伽趺座の樣子から僞て塗つて有つた。あんな力のない雷鳴に倒れそうな釋迦は、むしろ出してもらいたくない。後向きにてもして、菩提樹で隱し終せる位いにしてなら、少しは見られたかも知れなかつたが。けれど柏木敏氏の釋迦はあれ以上出來ないと思ふ。だから決して、演者を惡く云ふのではない只あれ迄にして上場させた幹部の人達に私は、聞きたいのだ。私は、むしろ柏木氏に對しては感心してゐる。眞自目によく、あれだけ勤めてゐて下さる事を。靜座の時、釋迦の目がよく動いた。あんな不思議な幕を見物させて下さると、勢ひ私達は、研究的體度で本當の釋迦を思つて、柏木氏を見る勿論、好奇心が强い、それだけに、氏の持役は苦しい、決して面白い、とくな役ぢやない。私は、あれだけの幕によく辛捧してゐてゐられたかを感心するばかりだ。

見てゐる私は、今にも金剛座から柏木氏が飛下りてそして大きな聲で怒り出しやしないかと心配してゐた位だつた。

魔王の「わが子等よ、何故さは遲き

釋迦、今佛と化りなんとす。

彼が心とろかせよ！



Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

「彼が心をまどわせよ！」

て純印度風の旋律(メロディー)よりなる輕快な拍子の踊曲に連れて、四人の妖女が現はれて、歌ひ踊る處は如何にも、きれいだつた。可愛らしかつた。けれどあれぢや釋迦が動きそうでもない踊りつきだつた。けれど舞姬達よりたしかに上手に役を働かせてゐた。

ユニバースとかキネオラマやコスモテリオンが入つたので、大分に下界から落ちそうな氣がした。稻光りや、雷鳴の間から、弱い、驚いたような釋迦が見へる毎に、あんまりいゝ氣持がしなかつた。つくづく歌劇(オペラ)の幹部の人に感心して、柏木氏を舞臺から逃げさせてあげたかつた。

朝が來た。夜の深さを通らない朝の光はあんまり强過ぎた、けれど朝と云ふ氣分は、よく現はれてゐた。一つは弦樂器が顫音(トレモロ)になつて、片方トロンペットの獨奏が鮮かになつたからだろうが。南部國彦氏の淨飯王は、服裝に於て全き成功を占めた。

けれど貫目がない、落付がない。内容がない。只輕い、輕い人のように見へた。ともすると、音聲が絃樂に打消されて聞へぬ時の方が多い樣だつた。もう少し重く、體度を深く、演じて下すつたらと思ふ。不二正容氏の車匿も、菅雪郎氏の烏陀夷も淨飯王の侍臣五人も、印度の色彩に於て生きてゐたと思ふ。それらの人の登場後、强い朝の光りで背景も建築もよく利用されて來た、そして登場諸氏みんなが集まつて、熱帶の色をだんだん思はさせて來た。そこに出て來た釋迦の弟子の汚なさ、もう、あきれかへる程だつた、私は乞食坊主とても叫びたかつた。全く「破壞者」だつた。温まりかけた舞臺を、亂

し切つてしまつた。私は乞食坊主の一人で、肥つた、脊の低い人の、不眞自目な事が氣に入らない。どこが釋迦のお弟子だか。

「釋迦」の歌劇は、全く閉幕の時にぶちこわした。二度と、あゝした、不必要なものを出して欲しくない。私達より、演者の方の不利益だから。

劇とは、違ふ可きものだが、あれ迄芝居じみた、歌劇(オペラ)をやり出すなら、私は、此處に、どうしたつて、眞自目と所作上手と、そして、淸い氣分を望まなけりやならない道理だ。

日本の歌劇(オペラ)の先驅者に私は望むで置く。どうか解釋をとり違へない様に、そして自分自身が役者に落ちて歩調を合せない様に。私はどこ迄も日本の歌劇(オペラ)の先驅者として勝利を握つて、負けることなく遅れる事なく、奮闘して頂きたいと願つて置きたい。

### 喜劇 出來ない相談 二幕 太郎冠者新作

之れは別段評をする程注意も集らなかつたし、それに、女優一人の「人」を考へさせられたものだから、到底はつきりは書けない。

二三、氣の附いた點だけ書いて置く。藤間房子の隱居役は可成りの出來だ、けれど自分が芝居をしてゐる事を忘れて、あんまり圖に乘つて、喋(しやべ)舌り出したので。いやな氣持にさせられた。けれどよく、笑はせてゐた。しかしそれが全く私には輕く笑はせたと思へない。重つ苦しい喜劇ぶ



Digitized by Google Original from UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

りだと　つた。

鈴木房子の孫娘鳴子は、ゴム人形の樣な聲をしてゐる。河村菊枝の八重子、森律子の絲子は、自分を餘程出したがつてゐた。喜劇の律子は全く拔目がない、子供のような、邪氣のない演じぶりだ。我儘な坊ちやんと書きたい。村田嘉久子の自稱文藝家秋子は上手に化けて出た。浪子の峰子は、一寸した場合にでも、いとしを氣に見せてゐる。背景と光線が無茶苦茶なのと、筋と、事實が滅茶苦茶だつたのは、二幕目の山王の場だつた。帝劇の開幕時間からひるの雷から、月が出たり、雨がやむだり考へて見ると、まるつ切り僞だらけだつた。一體に、あんまり、ふざけ過ぎて、品が惡かつた、もう少し氣持のいゝ喜劇を、これらの人達に依つて、見せてもらふ事を今から賴むで置く。道具建て氣持の好い處は、序幕の庭先きの處だつた。如何にも涼しそうな色と艶味を見せてゐた。今度とつくりと喜劇だけ拜見して、面白い事でもかきたい。

新作所作事　風俗名所合　二場

「八橋の杜若（かきつばた）」

幕が開くと直ぐに杵屋の長唄で「さゝがにの蜘蛛手に渡す八橋や咲亂れたる紫は在吾の君のかほよ花」と、此處で眞中の赤毛布が黑ん坊二人ではずされて、杜若の後がセリ出して、業平卿、紀の善友、仕丁太郞と次郞と、太刀持や馬なんかお雛祭りの飾臺人形の樣に浮出して來た。

澤村長十郞の業平は馬から下りて、笠を、はずしてからの形がいゝ。作りが丸く出來てた。顏も優



Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

しく、色彩されてゐた。
澤村傳次郎の善友は、仕草が一つ一つに品が好く、態度も老滑だ。業平と同じく顏の作りに心を付けて有る。仕丁の宗之助の太郎、同じく國之助の次郎は身體全體の配色が面白く出來て、非常に、氣持よく見せる。「此の太郎の戀人も京の田舍の片邊り」て踊り出してから、長唄になつて次郎と共々所作をする、あすこが最も輕いと思つて感心した。

不思議なことは、宗の助の踊りだけは杵屋にしつくり合つてゐる。業平の時も善友の時も、雛はないが、特別に宗之助の踊りが、きびつゐてゐた。

場面の調子でいゝと思つたのは、馬の留場所がよかつたのと、馬丁の姿が繪の樣だつたのだ。

太刀持の小供は、いつも泣きそうな顏だつた。聲も惡い「殿樣のお立ち、お馬をこれへ」が、もう少し通る樣に、してほしい。馬の足を勤める二人の人の名前が番組にはないが。女優諸氏の不眞自目な仕事ぶりを見るにつけ全く、馬の足は、忠實だと思つたそして細心、研究的に進歩してゐる。

馬を留めて置く間にても、首を、振つたり、胸をかがませたり、馬の特長を、よく出して見せる。

どうでもいゝ事だが、私は馬の二人の仕事に忠實なの を他の不眞自目な人に比べて賞めて置きたい。

ダークチエーンヂで宇治の螢狩を見たが。到底所作事として見る價値のないものだつた。

目と指先きの働きが一所て有るべき筈なのに、めいめい我儘勝手に動いてゐる。大勢になつてから

は増々壊れて、滅茶苦茶になつた。私は不眞自目な魂の拔けた人達を考へて悲しくなつたので、幕の閉まらない內にボックスを出た。

■六月二一日午後三時■

——紅　　吉——

# 仙女島

蓋し何れの森も、これを守る精なきはなし――セルヴイアス

コーモンテルは、所謂嘲笑的意味を以て迎へらるゝ道德訓話に『音樂は低い感じの自然から、一層高い調子の感じを表はす唯一の才能である。』と云ふて居る。

彼は玆に明かに、快き音調から生ずる享樂と、此の音調を創造する處の能力とを區別する事を忘れて居る。音樂のみは、他人の賞揚を要せずして、其れ自身に最も完全なるよろこびを感ずる事の出來る唯一の能力である。音樂が寂寥に於て最も享樂を感ずると云ふ事は他の諸能力と共通である。咄家が明かに享樂することが出來ず又は、頂點に彼の愛國心を現はす事が出來ない處の、此の思想は、吾々が全く孤獨な場合に於て最もよく味はゝれる最も高尙なる音樂の法則である、音樂に對するこの提議は、ライヤの爲めに眞にライヤを愛する人又は、その精神的必要の爲めに愛する人には、直ちに認められる。

しかし果散なき人世に於て尙ほ滅びざる唯一の喜びがある。即ち完く寂寥な場合に、音樂に依つて起る一種の感情よりも、より以上の唯一つの喜びがある。それは他でもない、自然の景色を默想する時に經驗せられる幸福である。此の地上に於て神の光榮を恰ら見る事の出來る人は、必ず寂寥のうちにその光榮を見る事が出來ねば成らぬ。

表現と云ふものは、私にとつては、――唯だ人間の生命のみに限らず、地上に生ふる青き聲なき物の凡てを除いて、――地上に現はれた汚點であつて、自然の守護神と戰つて居る。

私は暗い谷間や、灰色の岩や、音もなく靜かに走る川や、不安らしく睡眠む森や、巍峨として地上の總を見をろして居る山々を見るのが實に好きである。私はこれ等のものを恰も一つの無限な、活力ある有情の完きもの即ち、其の姿は極めて恐ろしく、而かも凡てを包括する彼の地球の巨大なる仲間として見るのが好きである。彼の地球たるや、その行く道は無數の星の間に開け、月はその優しき侍女日はその力ある君主、その生命は永遠に亘り、その思考は神のもの、彼が喜びは智識である、其の運命は廣莫にして、無邊に沒する。吾々が彼に就て認知する事の少なさは、恰も自分の細胞に寄生する微生物が、私に就て認知することの少なきと撰ぶところかない。斯くの如くこれ等微生物が吾々に就て考ふる如くに、我々は、彼れを非情のもの、物質の生命なきものと考へる。

吾々の望遠鏡及數學上の發見は、僧侶仲間の特に無智な者共の哀願にも拘らず、何れの方面に於ても、その空間即廣がりは、全能者の眼には等しく重要なるものと云ふことを說明して居る。星が運行する彼の軌道は無數之生物が、衝突なしに進化するのに最もよく適合してゐる。此れ等の生物の形體は一定の方處に於て懸命に出來るのだ。多數の物質を包合する樣である。と同時に其方處自身は別の方法で布置せられた同一方處が包合することの出來るより以上に、稠密な住民を包含し、得るやうと排列されて居る。そして廣かりが神の現はれて有ると云ふ事に就て、空間はそれ自身無限であると

いふことに就て、別に異議はない。何故ならば、空間を充たすべき物質は、多分無限であるから。吾々が、生命あるものに依つて得るものは原理と云ふ事である、勿論吾々の判断の限りでは、神の働きに於ける第一原理である。と。明に了解するに及て、廣く限りなく偉大な世界に思ひ及ぼさず、日々吾々が踏んでゆく小世界にのみ限つて考へるのは殆ど、無意味な事である。

吾々が終りなき螺旋的循環の中に、循環し、遙かに遠き一つの中心の周圍を有らゆるものが、廻轉して居ると云ふ事を見出した時に、類推的に同じ様な方法で生命の中之生命、即偉大なる生命の中を小さな生命が、唯一つの神之生命の中を、あらゆるものが廻つて居ると考へられるではないか。短かく云へば、動かないからと云ふより外には、深い理由もないのに、精神のないもの卑しきものと蔑しめて居る廣大な谷間の土地の、それよりももつと、果敢ない現在又は未來の運命を信ずる人々自重心を適して、吾々は氣違ひの樣にうろついて行く。

此れ等の考へは自分が毎日山間や、森の中や、海や川の傍で、瞑想する毎に常に俗世間が空想的と呼ぶに相違ないやうな傾向を私に與へる。

自分は此之景色を追ふて、幾度もづッと遠いあたりに彷徨ひ、又幾度も孤獨で居た。此の興味からして、多く暗らき谷間をさ迷ひ、碧空を反射する鏡の如き湖を凝視した。

そして自分はさ迷ひ歩き唯獨り眺めて居ると云ふ事を考へる爲めに、益々此之興味を深かめられた。

口輕るき佛蘭西人は、「ジンメルマン」の有名な著述に『寂寥とは一つの壯美なり、然れどもわれ〳〵は如何なる場合に寂寥が眞に壯美を感ぜしむるかを考へざる可からず。』と云つて居る此の諷時に對しては反駁する事は出來ない。然し運命といふやうなものはないといふ、ことは事實である。

恰度、私が連山起伏し、山中にはうそぶき流るゝ川や、睡れる湖があると云ふ、誠に淋しい地方を獵り旅した時、偶然にも一つの溪川の島のほとりに出た。

私は六月の茂つた青葉の中を突き進んで、芳香を放つ名も知らぬ、灌木の幹の下の芝生の上に、投げる樣に坐つた。其時或は景色を默想しながら、まどろんだかも知れない。私はかうして只景色を眺めて居た樣に思つたが、これは景色が帶びて居る幻象の特徴なのである。

夕日將に沈まんとする西の方を除いて、三面は靑々した森が壁をなしてとり圍んで居る。小さい溪川は、烈しく渦卷いて流れて居るが、忽ち視野の外に沒して恰も木々の深い簇葉の中に吸ひ込まれてしまつて居る樣に見えた。そして自分が橫はつて居る上の方を眺めた時に、西の方大空の夕日の泉からは、黃金色に輝く紅色の瀧が、音もなく、長がく谷間に注いで居る、深夢の如き幻が畫かれた短かき回想の中途に、靑き浮島一つ、流れて最中に橫はつた。

「すべてのものが、空中に懸るかと岸は入亂れて陰影多し」

玻璃の如き水の面は、鏡と澄んで濃綠の芝生の匂配もたしかに何處から、その美くしい廣がりも占めて居るか云へない。私の居る場所は、岩の東西の兩端を一望の下に集め得る所であつたが、自分は

此れ等の光景の中て誠に著しい違ひを見つけた。島の兩端正しく美くしい花園の眩い婦人部屋て傾く夕日の眼の下て、火のやうに燃え輝き園の花は艶に笑つた。草は短かく、露を含んで香氣を放つて居り、シャグマ百合は諸所に點綴して居る。樹々は柔軟に、喜ばし氣に、活き／＼と、高かく而も細つそりとして、東洋的な風姿をして居る。そして幹はなめらかな、光澤ある雑色である。

其處には凡ての物の上に、生命と喜びの深かき意識がある様に思はれた。天より吹く風はなくとも、無數の蝶々それは或は羽のある tulips を見間違へたのかも知れぬが――、蝶々は靜かに行き交へあらゆる物は動いた。

島の東端は、暗らく陰げつて居る。暗がり、美くしく穏かな暗がり、――此所では凡てのものが皆透き通してある。樹々の色は薄くらく、必滅と不暗の死を悲しむ如く、悲哀な厳粛な、幽霊然たる姿して愁へてゐるやうてある。草はイトスギの暗緑色を帶び、その葉の先は皆な首垂れて居る。そして此處、かしこ低く狭く、餘り長からぬ小丘が恰も墳墓の様に散在して居る。

假令その周圍に芸香や迷迭香が生へまつはつて居ても、それは決して墳墓ではなかつた。

樹々の葉かげは重もくろし氣にのびて、水面は其處に閉ぢこめられ、その最も深かき處は闇中に沒して居る。

私は、太陽が次第に低く沈むにつれて、あらゆる陰影が薄すれて、悲し氣に立木より離れて行くのを見た様に思ふ。斯くの如く影は皆な流れにとけてゆけば、又他の樹から生じた影は消え去つた前の

影の跡を追ふ。

一度鎮まつた私の空想は、非常に刺戟せられて、忽ちに自分は幻想の囚はれ人となつて終つた。「若し魔法にかかつた島が有るならば、此れが即ちそれであろう。此處にこそ、僅かに生き殘つた神仙が來たり訪ふのであろう。この緣深かき墓は彼等のであろうか、然らざれば彼等は人間が其の生活を放棄する樣に、彼等の樂しき生活を放棄したのであろうか。

死ぬと云ふ事は、彼等が悲し氣に消え行くと云ふよりも、恰も樹が次第に陰影から陰影に讓る樣に彼等の生命を、少し宛、神にゆだねて彼等の生命が解體に歸するのではなかろうか。

こんなに、次第に弱められ、黑みゆく影を吸ひこむ水に對して、衰へゆく樹は何か、即ち生命を卷き込んでゆく死に對する神仙の生命に外ならない。と私は呟いた。

私は眼を半ば閉ぢて、斯く思ふた、夕日は急に落ち、夕潮は島の周圍をうづ卷きつゝ、無花果樹の樹皮の、大なる白き片々を乘せて流れ去つた。鋭敏なる想像は何物にでも、その喜ぶものに變じて行く。私が斯う考へた時に、私がその時迄考へて居た、その仙女の一人が島の西端の光りの中から、闇の中へ靜かに橫ぎつた樣に見えた。かの仙女は特別な碎け易い、空木舟に眞直に立ち、形なき櫂にて漕ぐ樣であつた。

消えのこつた、夕日の餘映に見えた彼の女の面貌は喜びの表示であつたが、彼の女が陰影の中を通つた時には悲哀の醜い陰を印した。

彼の女は靜かに流れて、遂に島を廻つた光りの國に退いて終つた。神仙が今した島の循廻は、彼の女が短かき生命の一年である。彼女は冬と夏とを通して漕いだのである。彼女の一年は既に終らんとして居る。これは確かと思ふ、何故なれば、彼女が暗がりに來た時、彼女の影は身體から離れて、暗らき水の中に全く吸ひ込まれて、そして一層暗らく成つた。

再び舟は現はれた。そして仙女の面貌には、憂はし氣な、前よりも悲し氣な風が見えた。

彼女は光りより再び、――一時非常に濃く見えし、――暗がりに漕ぎ入つた時、影は彼女を離れて黒橙色した水の中に落ち暗闇は一としほ黒ろみを增した。斯くて再三、彼女は夕日に沈みゆくにつれて、島を漕ぎ廻り、光りより出づる度每に、彼女の面貌は一層悲哀に溢れた。同時に彼女の身體は弱々として、薄く朦朧となりそして暗闇に漕ぎ入る每に彼女から暗き影は水に落ちて、影は次第に黒ろみを增した。併し遂に夕日が全く沈み去つた時、今は彌々幽靈のやうに影が薄くなつて仙女は暗國の世界へ竿さして流て去つた。それより以上私はもう言ふことは出來ない。何故ならば闇は萬象を包み私は最早仙女の魔力ある姿を見ないのである。

■完■

――ポオ――

# 圓窓より

近頃通讀した書物の中から田中王堂氏の「哲人主義」と千葉鑛藏氏譯の「輓近倫理思潮の傾向」とをとつて、讀後の感想とでもいふやうなことを少し書いて見たいけれど、自分の淺學不識をよく知つてゐる私は批評の如き潜越はさておき僞らぬ感想を記すことさへ何だか物恐ろしい。只二書によつて敎へられる其の多かつたのに對して感謝の意を表するかはりとしたい。

一、哲人主義

學徒の識見と志士の意氣とを併せ有し、志士の經綸を以て學徒の研鑽を積み學徒の襟期を以て志士の利功を建てむことを生涯の理想とすと宣言して昨年初夏「書齋より街頭に」を著した田中王堂氏は近く又「哲人主義」二卷を街頭に出された。收むるところの論文十七篇。

氏は自由思想家である。併し破壞主義者ではない。如何なる場合にも瞬時も過去の長き歷史と現代の社會生活とを忘れぬ所謂相對的の自由思想である。

氏が盛に提唱せられる實驗理想主義も、世の淺見者流からともすれば現代の謳歌者、樂天主義者と

まで誤認せらるゝ改造主義もいづれとして現代に生活し、現代を批判し、現代を指導せむとの氏が抱負に出てないものはない。高きに立ちて、廣く人生の事相を觀察し、其關係を明にし、その調和、統一を企て、向ふべき方針を指示せむとする態度の書中到る處に著しいのも故あることだ。

此精神は「書齋より街頭に」と一貫する動かすべからざる精神であつたが、今又「哲人主義」二卷を貫流するところのもの。

なほ兩書の間にあつて、氏が理想と嗜慾とを人間生活の二側面と見、人間生活を嗜慾の整齊と、統一とに歸せしめむとするところのその根本思想に於ては牢固としていさゝかの動搖も見なかつたことを窺ふことが出來る。

さて氏が目下の我が社會の特徴より切實に其必要を認めてこゝに新に唱道された「哲人主義」とは果してどんなものだらう。

「實に今日我が日本に於て吾人の最も闕如するところのものは人類の運命の中に現代の志向を察し、世界の形勢の中に祖師の天職を知り、一國の大局の中に個々の活動の相關を劃するところの高邁なる知見と雄深なる經綸とである。されば今日以後吾人にして眞に文明の進捗と幸福の增加とを圖らんとならば是非とも維新以來五十年間「手より口へ」貧乏政策によつて絕えず臚列し、推積し來たつた一切の彌縫と補綴とを整頓し、統一して、一つの理想又は目的の下に呼應する一つの有機體とならねば



Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

ならぬ。而してこれを爲すはたゞ理論と實行とに於て、人間の欲望と、社會の組織と現代の傾向とに準つて一切の活動を改譯し、改價し、改整することである。而して私の見るところでは最も有効にこの大業を就し得るものは獨り哲人主義である」

とは著者の自信である。乞ふ、まづ謂ふところの哲人を見よ。

哲人とは治者である。主權者である。凡俗の欲求を統一せる方針である。

「治者は最高、最優の意義に於ける哲人でなければならず、政治は最高最優の意義に於ける哲人主義に依つて運用されねばならぬ。

とは氏の斷言するところ。而して哲人の當然具有すべき資格として氏は以下の二ケ條を上げた。

一、哲人は現代の理想を樹立するために絶えず、其事相に接即することを怠らない。

一、哲人は民衆の意志を建設するために、絶えず、其欲求を參照することを忘れない。

それだから「哲人主義によつて把持せられ、皷吹せらるゝ方針又は政策は民衆の欲求を參照するがそれに落段しないといふことゝ、民衆の欲求を淳化するがそれを超越しないといふことの不思議な性質を有つてゐる。」

「哲人主義」二卷は實はこの見地に立つて、觀察せられ、研究せられた、政治、道德、學術、文藝、宗教、教育等の諸問題に關する論文集である。

一個の學徒たると同時に、一個の志士を以て任し、理論に興味を有すると共に、實行に興味を有する人は、哲學と政治とを一つに考へる人は、社會國家に對して斯の如き實際的の覺悟ある學者は、功利主義の哲學者はその「よしあし」はしばらくおいて現今氏を外にして他に一人として見まい。

世に氏の態度を我が學說を賣らむ哉、賣らむ哉といふやうな調子が見え透いてどうも端たないなどと言ふものもある。併し、それは未だ氏の心事を知らざる淺慮が發する言葉に過ぎなからう。成程氏の提唱振りには素晴しい劍幕がある。例へば二卷の大部分を領する「岩野泡鳴氏の人生觀及藝術觀を論ず」の長論文の如き、隨所に思ひ切つたブラウドの言を矢つぎ早に放つてゐる。殊に終末に於ける。

『或る史家が其の「英國十八世紀思想史」に於てエドマンド、バアクの政論の特長を敍して「彼の創說は每に特殊の實例に依つて抑制せられ、且證明せらる。しかも猶も彼は凡べて特定の場合の中に一般の原則を認得す」といつたが僕の評論家として世に立つ抱負も亦た此處に在る。

されば僕は何時、如何なる時事問題に逢着しても常に其れを通じて世に對つて永劫の敎訓を與へることを忘れぬものである。

名を時事の評論に藉りて一時の際物師たることは學者の恥辱とする處で、また僕の恥辱とする處である。されば此の評論とてもたゞ泡鳴氏の人生觀と藝術觀とを緣として僕の人生觀と藝術觀との一斑を披瀝しようと試みたのであるから歲月の推移に依つて其意義と價値とか急に失はれるものと



Digitized by Google
Original from UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

は考へない。併し食膳を薦める者は客人の食欲の熾んな時を撰ぶのを當然とする、僕の今此の評論を世人に薦めるも亦是の意味に外ならない。

世に若し僕の此の計畫を評して牛刀を以て鷄を割くに等しとするものがあるなら其れは僕の心事を解せぬ者である。獅子が兎を搏つに全力を以てするは彼れはそれに依つて己れの勢威の發動を享樂せんとするものである」などは可成り烈しい。

併しかの如何なる場合にも「私」を忘れ得ざる小人が只管に自己を辯護し、自己價値を高めむとの卑劣に出てる意識的な偏見、曲解や、自信なき矯慢不遜に對しては嫌惡の念に堪へない自分もこれには却て痛快を覺ゆるは何故であらう。思ふに全く氏の學者らしき無私の態度、只自己の所說に對する終始一貫せる厚き自信、眞理に對する熱誠より自から發するものだからではあるまいか。私は今日の文壇にかういふ態度の評論家の一人位ゐるのはうれしい。

併しこゝに不可思議なことがある。

氏ほど人として志士的方面に、實行的方面に、情意的方面に缺けた人は少ないやうだ。氏が特に志士的方面を揚言するだけそれだけ人としての氏にこの方面の缺陷を見出すことは一見不可思議のやうで實は極めて可思議のことではあるまいか。

氏自身は何と言つても、又其抱負は何であらうとも、氏は到底學者肌の人である。單なる理論家で



Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

ある。吾々の生活そのものに、何等の交渉もないやうな概念の詮議立てに多大の精力を消耗して惜しまざる學者である。志士の利功を建てむがために積まれる研鑽も畢竟理論の爲めの理論、哲學のための哲學に終るところも少くない。よし又氏がいか程絶えず現代の事相に接即し、絶えず民衆の欲求を參照することを怠らないにせよ、それによつて氏は只理論としての現代の理想を樹立し、民衆の意志を建設することは或は出來やう、併しそれを以て直に實社會を動かし、人心を指導せむには鋭さに於て足らざるのみならずあまりに血がない。熱がない。力がない。

氏に、現代の人々に共通な利益と、幸福を發見するの聰明を許すにしたところがそれを運用し實現するの力量は所詮認められない。

惜しいかなこの點に於て、氏が費すところの幾千萬の大文字もかの救世軍の一士官が路傍に立つて叫ぶ御粗末な說敎にも及ばない。

それは又何故であらう。

言ふ迄もなく世人は氏の該博な智識、高邁な見識によつて多くを學んだであらう。殊に自分のやうな頭腦の粗大なものにとつては今迄口にしながら實は不明瞭だつた色々なことに明快な定義を下し、概念を明にし、それら相互の關係を知るなど殆ど時に煩はしき迄、緻密精細な氏の說明によつて啓發された處は決して少々ではない。



Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

然るに殆ど言ふべからざる迄の物足らなさと、空虚と、さては如何に些細な問題をも其根原の根原に訴り、人間生活の根本性から出立して論せねば滿足しない氏の徹底的態度にも拘はらず、自烈つたい迄の不徹底を感ずるのは何故であらう。何故自分の生活そのものに何等の影響も何等の主觀的滿足も齎さないのであらう。

氏は下巻の二二頁に於てこんなことを云つてゐる。

「比較的に人生又は社會に活らいてゐるあらゆる要素を有機的に觀察した上で見解を立てるのと、單に自分の安心を求めることの急なる餘り、唯己れの經驗や、感情のみを材料として見解を立てるのとの間には大なる相違がある。此場合には前者は通例客觀的の說明と見られ、後者は主觀的の解釋と見られてゐる。」と、

氏は正しく前者に屬すべき人。

自分は氏が常に人生を有機的に、關係的に、發展的に觀察し、社會的に、具體的に、作用的に推論する態度を多とし、又これが近き過去に於ける思想界學術界の趨勢、特色なることを認めぬものでもないが、併し全然客觀的な說明、之れが何であらう。それがいかほど巧妙な又大仕掛なものであらうとも、あらゆる人生の事相がいかに有機的關係を有つて整頓し、調和し、統一されてゐやうとも、我々はそれを見せ付けられた時成程と感心する丈である。それ以上何ものもない。

自分は氏自身が卑しんでゐるらしい主觀的解釋の方面を氏に望んでゐる。氏の學說にこの方面の缺

けてゐるのが無暗にさびしい。悲しい。

氏の哲學に廣さはあつても、深さと、强さのないのは力强き根底のないやうに感せられるのは全く「自我なき哲學」の一事に歸しはすまいか。

自分は徒らに社會の人生のと入口の廣さ大さを望まむよりも只管に自我を深く觀察し、研究し、批判した哲學に出逢いたい。

今自分は偶然にも氏が曾ての論文、「道徳評價に於ける情的評價の作用及び制限」中に道徳評價を組織し、支持する上に缺くべからざるものとして述べられた「智的評價と情的評價」との二要素に想到した。て、特にこの言葉をかり來つて氏の係はる世界を少しく覗つて見やう。

氏の世界は知的計算の世界である。從つて氏は情的評價に對する眞正の理解同情を有つてゐない。

氏の世界は何程擴大せられやうとも關係によつて成立する世界である。物自身に就ては何事も知られてない。

氏は如何なる場合にも一事一物を絶對として見ることの出來ぬ人である。

氏は、詩人としての素質を全然所有しない。

だから其言ふところは總て相對的である。條件的である。部分的である。一時的である。現代を離れて無意味なものである。

――區窓より――



Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

「僕は立論の方法に於てエドモンド、バアクに私淑す」といふ氏は必ずや直に凡ての特定の場合の中に常に一般の原則を觀得するもの、如何なる時事問題に逢着しても常にそれを通して世に向つて、永劫の教訓を與へることを忘れぬものだと云はれるであらう。併し不幸にして自分は「哲人主義」二卷を通して氏の考へるところの特殊と普通との關係は遂に明にされなかつた。

知的計算に生きる當然の結果として、其觀察は歷史的、社會的であり、從つて功利主義者である氏にとつては所詮情的評價—我等が情念の力によつてのみ到達し得る絕對界は、絕對界に行はれる情意の眞理、即一般獨法によつて運用せられたる智慧は氏にとつては單に非論理的な、獨斷、迷信とより外、理解することも出來なければ、鑑賞することは尙更出來ないのはあやしむに足らぬ。

大宗教家、大藝術家、其他偉人と呼ばれたる人には知的計算の方面の卓越ももとよりだが、殊にあらゆる事物を絕對として見るの能力—情意の力に於て一層優れたものがなくてはならぬ。

實行家と言はれる人は少くとも實行の瞬間に於ては其行に顯さむと欲する觀念を絕對となすことによつて、そこに限りなき實行力を得つゝあるのだ。

悲しいかな王堂氏は絕對と沒交涉の人である。情的評價の要素を缺ける人である。故に其學說は理論としていかに徹底すとも人格として何の徹底したところを見ない。

其提唱せらるゝところは皆外延的のもので內含的なものがない。氏が眞理とするところは客觀的の眞理、外部的觀察より作り上げられたる關係的、相對的部分的の眞理、臆病な知力の眞理である。



Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

だから熱がない。力がない。人を動かさない。

氏が折角の立派な學説も其實際的効果の少ないのは偏にこれが爲めであらう。

尤も氏は我が國が最も多く必要を感ずるものは智力であつて、情操ではない。理論であつて、信仰ではない。光であつて熱ではないと認める人ではあらう。又同時に自己の智的卓越を自から頼む人ではあらう。併し苟くも一個の學徒たると共に一個の志士を以て任ずる以上は知的計算の方面と共に情意評價の卓越もなくてはならぬ。

然らざれば人々には行爲の一般的方針を與へることはよく出來るとしたところが、其方針を靈化し、醇化するだけの方法を與へることは出來ない。

氏が宗教家や、藝術家の心境、其心持、態度を、彼等の生活を、内部的に觀察し、理解するの能力は殆ど缺いてゐるやうなのも同様の理由によつて容易に首肯し得ることゝ思ふ。

自分は特に「泡鳴氏の人生觀及藝術觀を論ず」や、「トルストイの絶對主義を論ず」や「抱月氏の自然主義を論ず」などを讀んでさう感じた。

氏の如き見地に立つて世相を觀察し、藝術も宗教も、哲學即政治の下に隷屬せむとするが如き功利的の態度は寧ろ眞の宗教、眞の藝術のためには呪ふべきではあるまいか。氏は斯くの如き問題に向つてはあまりに立ち入りて容喙するの資格なきものではあるまいか。

氏が僅に理解し得たる宗教は既成宗教の形骸に過ぎぬ。宗教本來の生命、本質に關しては殆ど知らない。其證據には、下巻の二三〇頁に於て、

「前略、是れを以て見ても宗教は過去の社會の機關であつて、藝術は現代の社會の機關であることが解る。人間の性情は激變するものでなく、社會の組織は急轉するものでないから、過去に必要であつた宗教は現代に於ても亦必要であると信じられる。併しこれを歷史の傾向に愬つて見ても、これを社會の大勢に愬へて見てもこれまで漸く殷んになつて來たと言ふことの信じられる藝術はこれよりも益々殷んになることはあらうが、これまで漸く衰へて來た宗教がこれより殷んになることがあるとは信じられない。過去の道德も、制度も、習慣も、見解も一切尙ぶに足らず、敬するに足らずと豪語した自然主義が遂に道德よりも、制度よりも、習慣よりも、見解よりも尙ほ舊くして朽ちたる宗教に賴らなければ人生の解決はつかぬと見越しを付するのは如何にも辻褄の合はぬ話ではないか。世に之より甚しき時代違ひがまたとあらうか。」とか、「藝術が宗教を其の伴侶として世道を維持し、人心を統一して行かうとするのは稱賛すべきことであつて決して非難すべきことではない。併しながら未來を代表する藝術が過去を代表する宗教に降ると云ふのは少しく變ではないか。」などゝ隨分抱月氏その人の言説、又はかうした言説を發せしめた其氣分、心持を全く理解しないうやな頓珍漢な理屈を入念に說いてゐる。全然相違する二者の三脚地から明かにしてかゝらねば、此自身の思想を發表するだけが目的なら知らず折角の批評も批評となるまい。いかに手きびしく辯難攻擊しても相手の心には案外響くまい。



Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

其他抱月氏が行倒れに出會つた時に吾々の情意が必然に經過する三段境を我的、半我的、他的と名づけたのに反對し、天地間に何が懸け離れてゐると言つても人間の意識など懸け離れてゐるものはないとのジェームス氏の語を引いて迄も悉く我的だと主張したのはさきに「書齋より街頭に」に於て漱石氏の「文藝の哲學的基礎を評す」の中で漱石氏が彼我の意識が合して一となるとか、此境界に入れば已に普通の人間の狀態を離れて物義の上に超越してゐるとかいはれた所謂物我同體の心境を全く事實と理屈とを無視した空談に過ぎぬと言ひ捨てたのと同一軌に出てたるもの。此の世界としてはこれも無理ならぬことゝ思ふ。

とうと何の纏つたことも書けずに仕舞つたのは悲しい。筆を擱くに當つてこんな無法なことを氏に對して言つたことを今更のやうに恐れてゐる。

■未完■

——らいてう——

# 祭

赤に、紺に、紫に向ふの芝居の、のぼりの色が、どれもどれも、薄灰色に、沈んで行く、……夕暮の幕が、もう下りるのだ。

子供達の萬燈からも、赤い灯が流れ出して…街の軒から軒に紅の光りが、長く長くつゞく……うつすらした紫の光りが、芝居のアーク燈にも輝き出した。

黒い箱に、寶玉をちりばめた樣に……そして其箱の中に私は立つてゐる樣に、思はれて狹い格子戸の外に立ちつくした。

一町程先きに、かゝつてゐると、云ふ屋臺から細い笛の音が、響いてくる……太い太鼓も、……時々は、うつ人の、景氣のいゝ聲もまじつて祭の夜のうれしい音調を、遠くから、きゝに來たのが、よい事をしたとつく〴〵思はれた。」

十八日にお祭を見にいらしつては如何幼い背にかへつてあのなつかしい「お祭の笛をきゝませう。

と云ふ葉書を、この町に住む幼な、友達からうけとつて、私は、寂しい、たゞ、淡い色につゝまれる屋敷町の私の家からはなれて、こゝへ、今朝きた。

大勢の男達の、働いてゐる廣い土間の一部は、古流の生花が、かざつてあつて……黑と、白とのだんだら幕の後は、腰かけに、昔茶屋に、あつた樣な手のついた煙草盆が二つ置いて、あつた。

こゝの人々は私の來たのを、よろこんで、呉れた。三社さまへも、こゝの、姉さんやら兄さんやら、美ちやんと云ふ、子やら四五人で出かけた。ペンキの毒々しい。活動寫眞の町へも行つて見て來た。胸の痛くなる程、私は其の町の空氣をすつて來た。

花の飾つた後には、青白いガスが座敷からもいる外、明りがない、そこへ人々はかたまつて、色々の話をし合た。お揃を高貴織の下にかされたこゝの兄さんと、赤い帯を胸高にしめた姉さんが一番元氣よく、高く笑つてゐる。格子戸の外にゐる私の耳に、氣持のよいまで、其の二人の笑ひが聲ひゞく。

屋臺からは又一しきり、笛や鉦の音がする……少さい時に、こゝに住まつてゐた外、こうした、にゝやかな、樂しみの多い祭の空氣にふれなかつたのだもの、……今夜と云ふ今夜こゝを、去るのも、又とまつてれむるのもいやだと思つた。

紅鹿の子を潰島田にかけて、黑ゑりからくつきりと白くぬき出した、首に、朱の半ゑりを、からませた、女が通る…前かみの銀かんが、ゆら〳〵とゆられて「あれよ、……兄さん、幸ちやんのいゝ人は」

『ふん……鹿島に、背が高いなあ……』

格子の中から、姉さんと兄さんの聲がする……、私も又其の女の後姿に目を落した、……幸ちやんの女……

幸ちやんも私の遊び仲間だつた『盗賊ごつ子のおまわりさんが。○○畫會へ入つてよ……』て、姉さんに云はれた時私の其の人の

大人びた、風におかしかつたに、……あんな大きな女から、うろんだ眼にじつと見つめられて、甘い言葉をかけてやると、思ふと、可笑しいのか、不思議なのか、私は、わけがわからない、自分は元のまゝの様にも、思はれて。

いつか、幼な友達は私の側に立つてゐた。

『モデルにするのでせう、白木屋のおこまさんの様ね』と私は話しかけた。

『幸ちやんのスケッチブックを見てごらん、……皆な、あの女の姿ばつかり……幸やのつたちやんつて云ふのだつて、』

『大きいわね』

『十八だらう、』

遠くの灯が風にゆれる……

『なつかしい町ね、古びた、茶屋の欄干まで私は忘れられませんもの、少し歩いて見ませんか?』

『いこう……今夜中歩いて見よう、小學校の方へも。』

足の向くまゝに、私達は、歩み出した。芝居の前にはをもちやの様な、ポンプが一つ置いてある、友衛門の時の火の用心になくのだそうだ。『ポンプ』と片假名でかいてある。

宗五郎様は、三社祭のにゝわいて、消えた様に寂しいマッチ箱をならべた様に、押合をしてゐる長屋がつゞく、其の三軒目は、黒山の人だ、義太夫を語つてゐるのである、汗をたらした四十男に、おしろいのこい若い女が三味をとつて、ゐた。

廣場に出た。つばなや、れんげの咲いて、ゐた。こゝは今紺屋の、はり場になつてゐるとか、暗い途である。

右の横町のつきあたりには、屋臺が見えてゐる、明るい、ガスの下には、赤い長いたもとを、ふりながら、『潮くみ』を、子供が踊つてゐた、行平の、青い袖に白い手がからまつて見える……

私等は、其の方へ、足が出た。ふとわきの、露路からおつたちやんと云ふ背の高い女と、幸ちやんが出て來た、……やつぱり屋臺の方へ。……。

■

『よくもあんなに歩けたものだ……』と私は又くりかへしたくなつた。

場末の町に、男の袖をそつとひく女の、流す、空涙の様に、しくしくとするかと思ふと、又強よい……と云つても、元氣のない黄ろい太陽の光線が頭からてりつけたりした、いやな日であつた。

須田町から新橋まで、をゝよそ、數へて置いた商店をHさんと、二人して『廣告係の方に、お目にかゝりたい』をいくどくりかへしたらう。

そしてなるたけ出して、呉れる様に、たのんであるいてゐる内は、さまでにはなかつたが、自分の家に、落ちついて、机の前に座つたら、私は無性に、いやな〳〵な思ひがした……希望なのは二三あるとしても、一つとして今すぐにたしかな返答をして呉れ



Digitized by Google Original from UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

た家はないのだもの…私の手のひらに、金貨が、十枚ほどもつてゐたらとつまらない事を、考へはじめる、親に、育くまれてゐる、と云ふ事も、はづかしい様に思はれる。精一杯に、働いて見たいとも思ふ。あゝ、又雨がふつて来た。低い調子の雫の音が不愉快な、怒にを、除けいに、あたへる。

■

ふと・この間から、鶯ケ池にすむKさまに手紙をあげて見たくなつた…懐しくて、私はたまらない、すぐ書こうと、思つて又妙に氣をくれのする様な氣がしてつめてしまつたり、そんな事をいくらくりかへした事だらう。

父の大きな机の上で、本を讀んでゐる内に夕暮の影が青く廊下に、うつり出した…しつとりと、庭の露草にも、露を置いて、河原よもぎの香よりもつと、もつと、柔かな、草の匂ひが私の周圍を、つゝむ…前の二階の窓には、あざやかな、『夏の夜の夢』とも云ひたい様な、ガスの青い色が、うつつた。

今日こそはと、私は書きかけた。…そして月並な事ばかりを書きつられて『みどりさま』と表紙を、書き終つてやつと安心してしまつた。

五六日前から、何かする事がある様でも、それが片がつかない様な氣がして仕よう方がない、今の手紙も其の一、…まだ、まだ私の胸の中には、黒いかたまりがあるらしい…

そしてそれが何だか、一寸は考へつかない…今よんでゐる、本にも倦きが来て、私は寝床へ行く事にきめた。

■

外出して、かへると。今日は半日姉のためにモデルに雇はれる事に、なつた。

形を寫生されるのが、たのまれない先は、いやであつたが、自分の自由に畫の中の人の氣分になつて、好きな形が出來るとなると、面白い。

黒い水のたゞよふ小舟の中から棹ばしに、あがる仲の町藝者の、ほろよひや、…花の散る夜に、戀の歡樂によふ年若い、享保時代の、男女、…夜さく、うす白い、花のみだれ咲く中に、月を仰ぎ、夕暮の歌を、うたふ天平の、少女…私のみにくい顔色はお白粉に、ぬりかくされ…短かな鼻は、細そらと、たけがのびて自分が、美しい男に女に、化けて行く、…自分の顔とはとつても、なく違つてもこれが私だと思ふと、たまらなく、嬉しい様な、思ひが胸に、みなぎる。

灯のつくまでも知らなかつた。父は、小唄まじりに、小幅に墨畫を、かいてゐる。

■ 六月の日記帳より ■

――歌　津――



Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

## □「あねさま」と「うちわ繪」の展覽會

田村俊氏が「あねさま」をこしらへて、長沼ちゑ氏がうちわ繪をかいて六月の二十五日から二十九日迄琅玕洞で展覽會を開かれた。

「あねさま」の三十いくたりはどれもこれも、きれいな千代紙と半紙半枚で着物きたり、顏が出來たり、様々な面白い作者の氣分が出されてゐた。私は、やつぱりお江戸の娘さんを思はずにゐられなかつた。三十いくつの「あねさま」がどれもこれも一つの色に列べてしまつたのは。ちと物足らない。しかし氣分は、三十いくつの「あねさま」のどれにもこれにも、くつきり出てゐたのが嬉しかつた。「娘節用の小さん」は、芝居面の一番いい處がつかまいて有つた。私の欲しかつた「あねさま」の一つ。「汐くみ」はどつかで感心して來た古畫の汐くみの型がそつくりとれてゐた。

これも、面白いと思つた。「小格子」は、なんだか妙に好きで欲しかつた「あねさま」だつた。遊女のあてやかさが、すぐ目に浮むで。面白かつた。「五人女のお七」や「おそめ」も「ふところ手」といふのも、みんな面白いと思つた。

名の解らない「あねさま」は、だれにでも一寸出來そうな氣もした。

買いたい、欲しいと思つた「あねさま」には、とつくに赤い賣約濟のビラが下つてゐた。吉井勇氏や、小山内薫氏が先着でビラを下げてゐらしたんださうだ。「あねさま」の乘つかつてる白い臺には、田村氏の名前が赤く捺してあつた。赤く捺した名前が氣に入つた。



Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

「あれさま」を探て貰つたら、琅玕洞の親父が五十錢だと教へた。來る前の夜中に。それが出かけて見ると、全く同なじなので、驚いた。五十錢の他に一圓の「あれさま」も有つた。

大低、いゝと思つたのが、みんな一圓だつた。きつと紙がいいんだろうと隣りの男がいつてゐた。私には解らなくなつたから、買はなかつた。「うちわ繪」は澤山青い壁に飾られてゐた。

六十七本だつたと思ふ。プリミチブなのが隨分あつた。けれど室に入るとすぐ、「うちわ繪」の色が赤と白にはつきり分れてしまつた。

強いと思つて見ると、何處から力が拔けて、弱い色が、たぢ〱する。赤い線だと思つて、つかまへると青い色と紫が横つちよから、のぞいてゐる。そして一度どつかで見せてもらつた樣な氣分が、終いまで、しつこくつき廻つてゐた。どうかすると早稻田文學の色まで引張つて來そうだつた。自分で紙を張つて作つた「うちわ」が面白いと思つた。

ほかに色んなのが、有つたが澁團扇もあたりまへのも、岐阜團扇も三角のも繪馬のような形のも始めて生れて來たような姿のも。どれもみな地色が筆者によつて、より以上生かされてゐたのは心持がよかつた。

長沼氏は、いろんな玩具に趣味をもつてゐられるそうだと或る友人が聞かせてくれたのを思出すまもなく、「うちわ繪」を見ると同時に、氏の所謂、玩具の面白味のような氣分が出てゐるのを見つけた。勿論色彩にも。

いつかゴオガンのノアノアを見た時、うわづつた光りの中に、氏の「うちわ絵」と同じような明るさを見出したことも思出された。

とにかく「アンプレッショニズム」なのだともいへそうだつた。紅地にチャンチャン坊主を畫てかいたのを、蛇の目の傘をあれさま二人の首がさしてゐるのが面白かつた。

だいぶ頭をひねつた、結果少し苦しい色が出たのぢやないかとも思つた。

どれを一本と、殊更にとりたてゝ買ふ氣にはならないけれど、あの「うちわ絵」みんななら買つて見たいように思つた。

「あれさま」の中に、「男一人」位あつてもいゝと鴻の巣に行つてから思出した。

カクテールを見て長沼氏の「うちわ絵」を又強く考へさせられた、酒の眞中に突さした櫻桃（サクランボ）の色を見て。

五色につぎ分けたお酒を青いムギワタの管で飲みながら「私」と「私」はこんな話をした。

「お前に、「あれさま」の色と、「うちわ絵」の面白味がよく解つたか？」

「なんだか解らない」

「お前は　けれど餘程感心してたぢやないか」

「ああ！」

「それでも？」

「ああ！」

■　六、二六、午後六時　■　――紅　吉――

# 編輯室より

■女子大學の櫻楓會から「家庭週報」が再刊されたことは誠によろこばしい。女子の世界を開拓するには女子自からその耕耘の勞をとらねばならぬとは同社同人等が雙手を上げて同意する處である。自分達の多少の經驗から當事者の苦心を十分察することの出來る私共は今冷かな批評を加へることは止めて只管其發展を祈つてゐる。

■新入會者、藤井夏、小笠原貞、北原末、伊藤遊江、

■私達は雜誌經營者としては誠に覺束ないものではあるが、今迄この方面にも出來る丈の注意は拂つて來た積であつた。併し目下の本社の經濟は可成り不如意な狀態にゐる。社員の方々も又總て私共幹部のものと心配を一つにして、現在の維持のため又將來の發展のため、多少を選ばす奮つて御寄附下さることを望んでゐる。

■「脊鞜」は第一卷一號から揃つてゐる。御望みの方には一部十錢で御讓りをする筈。

■らいてう氏の左手でしてゐる戀の對象に就ては大分色々な面白い疑問を蒔いたらしい。或る秘密探偵の話によると、素晴しい美少年ださうだ。其美少年は鴻の巢で五色のお酒を飲んで今夜も又氏の閨窓を訪れたとか。

■大變のびのびになつたボオの散文詩集もいよいよ來月こそは印刷所の方へ廻すことになつた。

■紅吉は子供の時淺草の十二階のてつぺんから落ちたので低能兒になつたのださうだ。十二階下へともすれば知らぬ間に足が向いてゐるのも深い因緣があるのであらう。

■紅吉は昆布と、海苔と、鰹節と、いり玉子と落し玉子、位しか食べない少年である。獸肉も鳥肉も魚肉も大嫌い。但し海老と赤鯛の鹽燒丈は例外である。

■研究會は阿部先生が箱根方面へ御旅行なさることになり、生田先生も遠からずに何處かに御出かけになるさうだし、らいてうも紅吉も木曾の夢ばかり見て居るし、社員の内にも東京を離れる方が多からうと思ふので七、八の兩月は休暇にした。

■脊鞜の女達は、名前まで、男がつて、脊くの、やれなんだのと世間の人達は、よく云ふさうだ、何でも、男に出來ない、是非女でなければ出來ぬと云ふ樣な、すばらしい作品でも、出たならば、と、思つてゐる。どうぞ、みなさまも勉强をして、どしどしと編輯の方へ、お作を御送りれがいたい。

■岡本かの子氏は近々に、その短歌集を公にされる由。

『爽』(モーパッサン、増田初氏譯)夢の家(阿久根とし氏)寶玉、(藤井夏氏)その折々(柳漪榮氏)等は、本月、編輯の都合上次號に廻した。

■瀬沼夏葉氏へ。…原稿と社員の出ちがひて大變に、おさわがせ致して、失禮を、いたしました。

■一週記念として、九月號は創作號を出さうと思ひます、只今から立派な、よい作品を、御作りになつて、お送り下さい。

■らいてうが建部豚音博士と華燭の典を擧げると誰かから聞きかぢつた紅吉は翌日の研究會てうんと油を採つてやるつもりて勇み込むて座敷にどなり込むだら、來てる筈のらいてうはゐなくて、初見參のH氏が驚いて首が引込めたそうだ。

■勝ちやんの姪に お雪ちやんつて子がゐる。

■火曜と金曜が來ると勝ちやんが研究會に行くつて出かけるもんだから、お雪ちやんも、一所につてよくせがむそうだ。

■勝ちやんは困つて仕方なしにお祭りに 連れて行つた、そしてお神樂を見せて、之が研究會よつて敎つたら、お雪ちやんは、そうつてすまし込むだそうな。

■鴻の巣で勝ちやんと始めて會つた或る洋畫家が紅吉に その晩こんな事をかいて寄した。

■勝ちやんの顔は如何しても 江戸人の型てすよ。それも古くから江戸の血を受けた。苦味のある直線て成り立つた淺黑い顔は慥かな印象を一つ一つ見せてゐないけれど、なんとなく鋭いしかし優しい心持を大きし表はしてゐます。それよりも、私にはあの人の、そーすかつて云ふのが氣に入つた、さーすかつて云ふやうな言葉は眞の江戸人てなければ云へないのです。

■歌津さんが 江戸趣味を 唱へることをその一言だけて是認します。

■[illegible]と勝ちやんの江戸趣味もどうやら本當らしくなつて來た。

■豫告屋の紅吉は茅ヶ崎の白雨に お菓子を送ります。SALONも送る、雜貨も送ると色々列べて置いた切り一度も小包を出さないので此の間小母さんから郵便局の揩底を嚴格にやつて欲しいと葉書が來た。

■別段傷をついてる筈てもないがやつぱり幼さい時十二階から落ちたのが原因て健忘性にてもなつてるのてせう。

■同人の林氏は今大阪京都名古屋と「故郷」の公演に行つてゐる、生れた國の大阪ぢや、大變な人氣て同窓生や知人の總見て大騒ぎだつたそうな。

■大阪でのマグダ公演は上場復活後最初の 舞臺なので、その筋のお役人さまが四五人主張の上每晩脚本と首引て嚴格な檢査が有つたそうだつた。マグダが激し切つて元の言葉(セリフ)でも使いてもしたら、幕の後で島村先生を呼むて大變な小言が出たとか。

■こうして迄巡業しなけりやとは、あんまりいい話でもないとは、協會の或る人の悔言。

■中野の小母さんが 外を歩くと近所の子供が、中野さんゝ、中野さんつて呼ぶそうだ。

■きつと清磨の姉さんの 生れ變りだと坊主が知つた風な口をきいてた。

■勝ちやんの家で初代豐國の役者の似顏を見て來てから紅吉は給具や白粉で毎朝いろんな顏をつくつてゐるそうだ。

■琅玕洞の歸へりに四五人で鴻の巣に行つた。鴻の巣の主人が紅吉になにか畫を描いてくれつて畫帖を出した、けれど紅吉はいやだいやだつて遂にかかなかつた。

■そして今度金曜の夜に來て畫をかきますと約束して字をかいて歸へつて來た。

■畫帖一枚に「鴻の巣の叔父さんが馬鹿に氣に入つちやつた」とかいた、そしてかいてしまつてから叔父さんと云ふ字を間違へたつてひどく心配してたら、紅吉の妹が傍にゐて「ぢやーよぼーゐるならゐる筈だとかきなさい」と敎へたら紅吉はその通りかいて、それに又つけ加へて、ゐらないのならゐらない筈だとかいて歸へつて來た。

■やつぱり同じ日にらいてうも行く筈だつたのに、日比谷で小鳥が籠からはなされた樣な逃さで巣鴨行に逃走してしまつた。

■いつもこの筆法で紅吉は大分泣かされてゐる。

■みんなで木内氏は大變若々しい人だ。千代紙を本に張つたり箱に張つたり、「あれさま」をこしらへたり、して可愛いゝ方だつてな評判を立ててゐるのに紅吉だけはきのふ初めて會つたくせに、やれおばあさんらしい子供だとか老蒸だとかお年寄りですなあなんか云つてゐる。どつちが本當か木内氏に聞いて見よう。

■らいてうの家の鳩が子供を產むだ。

■白いのと黑いのと。夜巣の中でクウクウと啼いてゐた時は、早く朝が來てくれればゐゝのに、そしたら子鳩を二羽とも抱いて頬ずりしてやろうと思つてゐた。が朝が來て急いで見ると恐ろしい恐ろしい子供だつたので紅吉はびつくりしちまつた。

■ポオの散文詩の翻譯も來月あたり出來そうです。今らいてうが一生懸命に骨を折つてゐますから。豫告もいよいよあらはれます。

■逝吾博士とらいてうが結婚するつて評判が隨分同人の耳にそれからそれと入つて來る。

■けれど同人は勿論らいてう自身も全く知らない事なんです尼崎の友人からもお目出度いとか云つて來たけれど知らないから見當もつきやしないつてその時らいてうはいつてゐた。逝吾博士ぢや少し……つて本人は物足りなそうだ「もう少し面白い相手かそれとも氣のきいたんだと思つてた。」と紅吉に話したから。然し此の話は先月の編輯室からの左手のラブ云々が影響だろう、けれどあの左手のラブは全く意外の處に有るらしい、とかいたところで私はちつとも知らないが、とにかく逝吾博士云々は事實ぢやない事だけを斷つて置く。

■今夜もらいてうに會つたら、なんでも婦人週報社の松本とかへて人がらいてうの留守中に來て、お宅のお嬢樣は近近お目出度いそうで御座いますがなんで聞きに來たそうだ。

■相手の逝去先生は、どんな感想をもつてゐらつしやるか一度きいて見たいもんだ。
■もし事實、逝去博士に限らずその他の人が今らいてうと結婚するなんて事になつたらさしあたり第一番に自殺する奴がどこか、らいてうの目につく處にゐる筈だ。
■別段同人の素つぱ抜ぢやないがらいてうの左手のラブの相手がききたいものだ。
■中野の小母さんからハナチヨウに連れて行つて頂く子供が三人ゐる。
■Mはいの一番お約束が出來てから一年と二日ばかり過ぎたとか、紅吉は九日位ひ、らいてうは八日位ひだ、けれど今年もどうやら秋風が立つてもペケになりそうだ。
■小母さん曰く「夏は天ぷらは大の禁、それにハナチヨウもお休みですから」
■小母さんの事をもう一つ書く、
■それは小母さんには今様油屋のお染さまが二人ついてゐる事だ。そしておいのお染さまは外國語が非常によく出來る人だそうな。兩方のお染さまから迫られる小母さんはこれから猶あついだろう。
■紅吉はもと淺草の玉乘小屋の口上いいだつた。
■それをらいてうに救われて今は大變結好な我儘を許される様な境遇になつてゐるから紅吉はらいてうの事を「唯た一人の人」つて呼むでらいてうによつて生きて行つてゐるそうだ。獵師の懐に飛止むものを、どうしたつて殺せるもんぢやないから。
■らいてうの一番好きなものわ、マグロの刺身、それからの酢物、あとはまだ知らない。
■杉本正生氏が今度浦野みろめと改名された。私は杉本の小母さんに私の我儘を只いつて見ます。
■どうか浦野みろめなんかよして、そして私の大好きな杉本正生の小母さんにもどつて下さい紅吉が一生懸命になつてお願いしますから。
■上野葉子氏が又寄附をされたとらいてうからきいた、只本當に青鞜を思つて下さるんだと聞かされてから馬鹿に嬉しくて涙が出た。
■阿部先生は暑中を靜岡附近で避暑なさる事にきまつて、二三日前に出立。
■生田先生は御家族と一所に多分茅ヶ崎へ。
■在京同人のうちでも五六人は出かける筈です。らいてうも、勝ちやんも、小母さんも、紅吉もまだはつきり決めない　、いづれ出かけるでしよう。
■蛇の大嫌らいな紅吉は木曾から信州にかけての旅行を非常に恐ろしがつてゐるが、やつぱり五日迄には東京を立つてせう。
■らいてうも此の月末に福島からお嶽の方に行くそうだ。
■社員の方で旅行なさる場合には是非面白い通信をどしどし願つ



Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

て置きます。

■編輯室からの消息をなるべく賑くやりたいのですがみなさんからのお通知がないので、やつぱり邪魔つけな奴のことをかく樣になりますから。

## 次號豫告

■京之助の居睡　野上彌生
■題未定(小說)　木内錠
■かさね　岩岡一枝
■丸窓より　らいてう
■未定(俳句)　白雨
■妻(小說)　モーパッサン　増田初譯
■寶玉(和歌)　藤井夏
■その折々(短歌)　柳清美
■叔父ワーニヤ(脚本)　瀨沼夏葉
■未定　紅吉
■習作の五(小說)　松本正生
■夢の家(脚本)　阿久根俊
■未定(散文詩)　ポオ

## ■寄贈書籍及雜誌■

三田文學　モザイク
下町　早稻田文學
北方文學　白樺
心の花　みづゑ
シバヰ　スバル
創と詩　藝文
東洋時論　歌舞伎
ザンボア　紅塔
層雲　アラヽギ
六合雜誌　ホトヽギス
俳味　短歌
十善寶窟　學燈
女子文壇　新人

亂れ雲　藤井瑞枝著

歌集　悲しき玩具　石川啄木著　東雲堂發行

——編輯——

### 歌集　悲しき玩具

若い啄木氏は死むだ。

「悲しき玩具」は生れた。

私達は、死むだ啄木氏を惜むと同時に生れたこの歌集「悲しき玩具」をいつくしまなけりやいけないと思ふ。

「悲しき玩具」は「一握の砂」以後の百九十四首を納めてある。それから感想「一利己主義者と友人の對話」「歌のいろいろ」が附録されてゐる。

一通り、ずうつと目を通して私は、死むだ啄木氏を惜まずにはゐられなかつた。

若い啄木氏は悲しき玩具をおいて逝つた。

歌集についての感想は次號に載せたいと思つてゐる。—紅吉—


青鞜同人譯

紅吉裝訂

ポウ散文詩集

■九月出版■


### ■一週年紀念號■

九月號は、『青鞜』を公に、してから、一週年目なので社員諸氏に何か長いものを、今からおねがひして、置きます。

皆様から、一つづゝ、いたゞいて、其内を、選らぶ事に、致しますから、原稿を、七月の末までに、お送りをねがひます。

編輯室より

——編輯室より——

# 青鞜研究會

社員外の婦人も聽講が出來ます。（事務所の方へ御申込下さい）

ダンテの神曲　（火曜日）　阿部次郎氏

モーパッサンの短篇　（金曜日）　生田長江氏

每週火、金の二回、午後三時より五時迄

會場は本郷區駒込蓬萊町萬年山（勝林寺）

會費一ヶ月金五拾錢

なほ委しくは事務所の方へ

## 雜誌規定

○毎月一回一日發行

○定價一册金貳拾五錢 ――郵稅壹錢五厘――

○原稿〆切期日は毎月十日限とす。

○前金購讀料(四ヶ月分)壹圓(六ヶ月分)壹圓五拾錢
(八ヶ月分)貳圓(十ヶ月分)貳圓五拾錢(一ヶ年分)參圓

○廣告料 (一頁)拾五圓 (半頁)八圓

○廣告は總て卷尾のこと、但し申込の順序に依る。

○振替貯金(東京口座一一六〇)に拂込まれたし

○郵券代用は一錢切手に限る(但し一割增のこと)

---

明治四十五年六月三十日印刷納本
明治四十五年七月 一 日發 行

東京市本郷區駒込蓬萊町萬年山内
青鞜社内
編輯兼發行人 中 野 初

東京市神田區美土代町二丁目一番地
印刷人 島 連 太 郎

東京市神田區美土代町二丁目一番地
印刷所 三 秀 舍

禁轉載

發行所 東京本郷區駒込蓬萊町萬年山内 青 鞜 社 (電話下谷三七七六) 振替東京口座一一六〇番

發賣所 東京市神田區表神保町三番地 東 京 堂 電話本局(一二一四)(三三一八)

大賣捌 盛春堂、北隆館、東海堂、


Digitized by Google Original from UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

# 三絃通解

## 一名三味線獨案内

何と言ても日本の音樂は三味線である淨瑠璃、浪花節、長唄、端唄はいはずもかな芝居でも寄席でも但しは踊るにも飲むにも三味線でなくては叶はぬのである。然るにこの樂器はオイソレと誰にでも彈けぬのである、その彈けぬものを樂理的に通俗に説明して勘處、間合、撥使なども平易明細に分りますから手と目のあらん限り何人にも容易に彈くことの出來る樣にしたものが乃ち本書である、殊に書中「三味線の樂理」は三味線を見たことのある人には一讀すべき要件である敢て黑人にも素人にも御薦めする珍本である

附録　音譜、端唄　俗曲、長唄　其他、數曲

特價送料共　金三十八錢

東京銀座四丁目四番地　電話京橋二二九八番　振替東京一三五〇五番
大阪平野町心齋橋筋角　電話本局一四六三番　振替大阪一三二九六番

**松本樂器合資會社**

東京小兒科院
小松小兒科院
養生園
内務省
傳染病研究所
内科橋田病院
警視廳官舍
文部省
永樂病院
遞信省官舍

# 御用牛乳所

**長養軒第壹牧場**
本郷區駒込富士前町四十三番地
(電話下谷二一一六番)

**長養軒本店**
神田區錦町一丁目十八番地
(電話本局二一一七番)

**長養軒第貳牧場**
小石川區原町十三番地

善と美とを併せ具へたる最も賑やかなる婦人雑誌

# 女子文壇

## 特別號

第八年第七號 七月一日發行

定價參拾錢 送料二錢

●誤られたる個人主義……早稲田大學教授 金子筑水

▲無名婦人傳

文士の妻、武士道の模範的賢婦、繼子繼母の美談、七十九媼、不幸なる下女

◎傳説の興味……文學士 高木敏雄

◎わが手に、幻像……巴里にて 與謝野寛

◎山上の湖畔より……水野葉舟

◎晴雨二日間……近松秋江

◎なやましい風……兒玉花外

◎浴室の青葉……太田喜志子

◎暴風の前 長曾我部菊子

◎見立祝ひ……前島優梨子

◎祭禮……村井たへ子

▲庭園の趣味

名流婦人數名談話

▲北歐旅行 カトリン湖上に浮ぶ

▲文藝協會劇「マグダ」の印象

▲十六歳の少女が丑の時參をした實話▲虚榮の爲に二百圓の金を持出せし令孃の懺悔▲女行商人▲都下女學校花くらべ▲ニコライ會堂の禮拜▲ぬれ衣▲癈兵院を訪ふ▲歩きながら▲お伊勢參り▲比叡登山▲奈良井河の畔

◎女性の發情期……大阪高等醫學校教諭 田中祐吉

◎婦人は何んな心を持てゐるか(上)……澤田順次郎

◎英米二國人の眼に映じたる京都の女……加藤朝鳥

◎東京往來(上、山の手と下町)……外島涙之介

◎小町問答……澤田撫松

◎婦人に旅行を勧む……岡落葉

●肉食と菜食の優劣……農學博士 澤村眞

東京市京橋大鋸町十二 女子文壇社出版 (振替口座東京第壹七貳九番) 取次販賣 全國各地書店

毎月一回
一日發行

# シバヰ

定價
二十錢

## 七月號

■恐怖（ホフマンスタアル）
楠山正雄氏

執筆者
秋田雨雀氏
吉村繁俊氏
本間久雄氏
島村民藏氏
河野讓氏

近代劇の舞臺
ウイド作「ねづみの跡」
ハウプトマン作「フロリアン ガイエル」
カルスワアジイ作「鳩」
ロスタン作「夢の王女」
フイスク夫人扮裝―レデイ パトリシア

■レパアトリイ セアタア
中谷德太郎氏

東京市
牛込區

シバヰ發行所

東五軒町
三十七

Digitized by Google

RESTAURANT

AND

BAR

夕方から納涼すゞみ
ながら御出て下さい

日本橋區小網町鎧橋脇

メイゾン
鴻の巣

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

月刊美術雑誌

# みづゑ

本誌は本邦最古にして且唯一の水彩畫研究の專門雑誌なり

水彩畫を描かんとする諸氏は一日も本誌を座右に欠くべからず

一部郵税共
金二十五錢

## 第八十九號 七月三日發兌

■中學生と水彩畫……石川欽一郎
■劇の背景(一)……山崎紫紅
■繪畫美學(二)……服部嘉香
■私に畫が描けたらば……磯萍水
■青木繁氏の畫を見た時……矢代幸雄
□春(水彩畫原色版)……故青木繁
□甲州御嶽の奥(同)……山本森之助
□上高地(同)……故大下藤次郎
□洗濯(同)……篠原新三
□黄泉比良坂習作(寫眞版)……故青木繁
□其他寫眞版數葉
■記憶に殘れる水彩畫(二)……三宅克已
■續三脚物語(四)……鵜澤四丁
■光風會展覧會水彩畫評……赤城泰舒
■其他、寄書、讀者の領分、問に答ふ等

發行所 東京小石川關口駒井町三 振替東京六九六三番 春鳥會 大下春子方

Digitized by Google
Original from UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

# 心の花

第十六巻　七月號　第七號

橙の精（小説）　小池秋草
少きアイヨルフ　草野柴二
紫の雫　高安安子
倫敦より　大河内國子
巴里より　與謝野寛
艫唄　川田順
松の雫　釋宗演
龍巻　石榑千亦
古今集の修辭　次田潤
秋萩帖考　彌富濱雄
萬葉集講義　佐佐木信綱

定價一部税共金十三錢●半年前金七十五錢●一年金一圓四十錢

東京日本橋區本石町一ノ一　竹柏會出版部
振替口座東京四三〇〇番

Google　Original from UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

# 最新刊

北原白秋著　歌集　**桐の花**　定價八十五錢　送費六錢

木下杢太郎著　歌集　**和泉屋染物店**　定價壹圓　送費八錢

石川啄木著　歌集　**悲しき玩具**　定價五十錢　送費六錢

ザムボア六月號　詩集　**勿忘草**　定價四十錢　送費二錢

東京市京橋區京橋際

**東雲堂**

振替東京五六一四

# ザムボア

## 七月號

五月一日（詩七篇）　木下杢太郎

ミユンヘン日誌
ウヰン日誌　石井柏亭

木枯と死傷（小說）　佐々木繁

評論　仲田勝之助

詩論及詩　三木露風

短歌　吉井勇

リルケの詩　茅野蕭々

ある詩集の序　相馬泰三

夏（詩數篇）
リベリヤの花（歌）
韮の三味線（評論）　北原白秋

定價一冊二十五錢
送費二錢


Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

草低く風の無き夜の螢かな　龜臺尼

# 俳味

## 七月號要目


女と俳句…………（卷頭語）
多代女のこと…………大野洒竹
蕪村と漢學（其五）…………久保天隨
私解芭蕉の發句（十一）…………沼波瓊音
菊舍尼の手折菊…………伊藤松宇
梢風の木葉集…………小倉鶴峯
星布尼句集…………本野亦士
龜臺尼の獨發句…………武田眉子
千代と花讃…………星野麥人
園女と其作句…………天野眞名井
桃葉集を讀みて…………一記者
默…………沼波瓊音
暗雲（小說）…………長尾素枝
文藝協會の私演…………夢助
白豚集…………酒井野梅選
課題俳句…………桑花、雪曉、素枝選
日除…………（懸賞俳句發表）
我が家の俳氣…………（懸賞文章發表）
通り雲…………レモン法師
夕顏の句…………千代尼筆
口繪　寫眞版



每月一回一日發行

定價
一部金拾貳錢
郵稅壹錢
半年分前金郵稅共　金六拾八錢
一年分前金郵稅共　一圓卅二錢

發行所
東京市本鄕區西片町十番地ろ九號
俳味社
振替口座　東京三四三四番

なつ花（歌）　茅野雅子氏
淡（歌）　矢澤孝子氏
京鹿子（歌）　茅野蕭々氏
扉（繪）　永瀬凉郎氏

同人作品

順禮歌（小說）　百田楓花
耳祭（詩）　鍋井克之
繪島（詩）　久世勇三
髑髏首（繪）　久世勇三
南國の女（繪）　鍋井克之
表紙（繪）　鍋井克之


# 短檠

5

七月

なつかしき夏の黄昏の光の季節がきた　われら同人の雜誌「短檠」の新しき裝ひをみたまへ

全頁日本紙印刷
表紙木炭紙
月刊
十五錢

七月末
短檠第一回展覽會

---

# POEMS-NIGHT

# 夜

百田楓花著
久世勇三裝

神經はつかれ
思索は何か夢をみる
むなしく腕をたれて
たゞそこに「肉體の秋」はあり

詩集、夜、第三頁

詩百篇
總六號印刷
表紙日本紙
三十錢
送料四錢
既刊發賣

---


大阪市東區内久寶寺町二丁目十八番地
短檠社版
電話南一八一〇三番


Digitized by Google

純文藝雜誌

每月一回一日發行

# モザイク

定價一册貳拾五錢

## 七月號要目

春の目ざめ（ウェデキント）……野上臼川
影の跡……五十嵐禎夫
晩餐……秋庭俊彦
アネモネの赤……藤井伯民
いろごと……廣川蓀泉
癡人……水島爾保布
赤い音樂……伊東勇太郎
旅のエピソード……矢部廣松
男の影と女の影……西田廻瀾
萬引をした女（『外光と女』の二）……山本露葉
編輯の後……モザイク同人
表紙繪……廣川蓀泉
裏繪……大野隆德

東京市本郷區東片町四十七　鼎堂書店發行
振替東京一七三九番

Google　Original from UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

# 月刊 藝文 雜誌

明治四十五年 七 月 號 七月一日發行

定價一部郵稅共二十錢 半年分一圓廿錢。一年分二圓卅錢

藝文は京都帝國大學內京都文學會の機關雜誌にして東西兩洋の學術文藝に對し最も謹嚴深刻の批判を下さむとするものなり

現代女子の老人觀　文學博士 松本亦太郎

創建淸眞寺碑　文學博士 桑原隲藏

能樂と洋劇　文學博士 藤代禎輔

南島を思ひて　文學博士 新村出

近重博士の「押韻法に就いて」に就いて　岩野泡鳴

更に西域記校訂委員に質す　ドクトル 荻原雲來

四たび荻原雲來氏に答ふ　新刊西域校記委員

創建淸眞寺碑（コロタイプ）　口繪

書籍一割引（書目進呈）　鷄聲堂書店

發行所　東京小石川原町六　振替東京一三五二　電話番町二六〇八　鷄聲堂

# 峽灣

## 第壹

七月十日發行定價一冊金貳拾錢

○寳珠玉（脚本）　黑田玄一
○死骸（摸倣）　山本朝太郎
○狩野の奥（短歌）　ゆめみるひと
○紹吉の話（小説）　恒川石村
○十八の狂ひ（小説）　宮本諄
雜録數件　松本青石等

東京市牛込區下戸塚町十五番地
峽灣發行所

Google
Original from UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

七月一日發行
第四年第七號

# スバル

定價金參拾錢
郵税貳錢

## 本號所載要目

死の勝利（小說）……石川戯庵譯
雁（小說）……森鷗外
夜の河（小說）……五百歌左二郎
二黑の巳（小說）……平出修
三週忌（小說）……江南文三
義隆の最後（戯曲）　灰野庄平
題未定（戯曲）　岡田八千代
LE PARFUMS（詩）　よさの、ひろし
詩數篇　高村光太郎
詩二篇　竹友藻風
湘南秘事　吉井勇
椋鳥通信　無名氏
歌
風景畫　中澤弘光

東京神田區北神保町二
昴發行所
電話本局四二六四番

Digitized by Google
UNIVERSITY OF CALIFORNIA

白樺

第三卷　第七號

七月號

七月一日發行

●定價一部三十錢●郵税一錢五厘●半ヶ年前金一圓七十錢●一ヶ年前金三圓三十錢●

# 目次

▲二人（對話）…………武者小路實篤
▲自己批評と生活と藝術と（感想）…………小泉鐵
▲田舍より…………南薫造
▲草（短歌）…………木下利玄
▲野人の頭（感想）…………平澤仲次
▲ポール、ゴオガン…………齋藤與里
▲ノア・ノア（ゴオガン）…………小泉鐵（譯）
▲成長（感想）…………無車
▲蝙蝠の如く（小説）…………有島壬生馬
▲或る女のグリンプス（小説）…………有島武郎
其他

## 挿畫

▲蛇の誘ひ…………ポール、ゴオガン
▲神前の吹笛…………同
▲耶蘇…………同
▲タヒティの風景…………同
▲タヒティの少女…………同

發行所　東京麹町區麹町二丁目二　振替口座東京二〇九一四　洛陽堂

Digitized by Google　…ADO BOULDER

# 北方文學

定價廿錢　**七月號**　郵稅一錢

□鏡の破片……相馬御風
□廣告の死……ソログープ
□茨の花と旅の歌……松岡白虹
□生活の統一……瀬戸義直
□朝やけ……シヤリアーピ
□病床より……森川柳歌
□「PIRATE」と「霧と想像と」……渡邊三角洲
□不思議な喜び……小川未明
□詠草……坂本潮歌等
□チエツホフの自然……吉江孤雁
□六月の創作批評……丸山直光
□ベリヨーザの中より……たけを

北方の傳説
漁夫と黄金の魚……昇曙夢
石地藏の恐怖……鈴木殘夢
瀧と湖……松岡白虹
闇の泣聲……倉若梅二郎

發賣所　東京堂▲上田屋▲北隆館

發行所　東京小石川區高田豐川町八　北方文學社


Digitized by Google

純文藝雜誌

# 詩と劇

七月一日發行

特價金三十錢

## 小說特別號

### 本欄

夏の惱み（小說） 小川未明
鎖（小說） 秋庭俊彦
盆燈籠（小說） 小澤久雄
朝（小說） 相馬泰三
父の歸る頃（小說） 丘草太郎
老いたる二人の者（小說） 野中賢三
扉（小說） 野尻抱影
宴會の後（小說） 福田夕咲
病院の窓（小說） 人見東明
北の海（小說） 相馬御風

### 附錄

古きより（論） 小川未明
主觀の開放（論） 本間久雄
艶なる風情（論） 福田夕咲
自己批評（論） 山村暮鳥
二階の窓（論） 人見東明
明石の浪（歌） 桐田蕗村
樹木の新綠（歌） 指田縫三郎
夏の憂ひ（歌） 若山牧水選

若き小說家の群（批評） 同人

前月の創作評（批評） 同人

大賣捌 東海堂 北隆館 至誠堂 良明堂 上田屋 盛春堂

發賣所 東京神田區神保町 東京堂

編輯所 東京市小石川區雜司ヶ谷町 詩と劇社

第五卷第七號

七月一日發行

# アララギ

記紀の歌より……十櫨
金槐集私鈔（五）……茂吉
獨詩（デーメル）……山宮允
童馬漫筆（歌論）……茂吉
六月の歌壇（評論）……千樫

太陽（感想文）……木下杢太郎
叫びと話（歌論）……伊藤左千夫
俳壇漫言……細谷不句
思ひ出づる折……玉男

自歎（短歌）……古泉千樫
眞鍮の火鉢（短歌）……柿の村人
犬の長鳴（短歌）……齋藤茂吉
櫻の少女に（短歌）……松島梧風

定價一部十五錢○半年八十五錢○一年一圓六十錢

東京市本所區茅場町三ノ十八　東京根岸短歌會

昭和44年 3月15日発行　【第3回配本】

青鞜 第2巻（第2分冊）

| | |
|---|---|
| 編著者 | 平塚らいてう |
| 発行者 | 藤原正人 |
| 発行所 | (株)明治文献 |
| 印刷 | 正明印刷 |
| 製本 | (株)三高製本 |

【分売はいたしません】　定価 3,800円

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

ASN
PER
PL
156
S45
v.2
no.7

University of Colorado at [redacted]
[redacted] 6746199

Digitized by Google

Original from
UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

現代ノ家庭ニ於ケル衛生思想ノ發達ハ實ニ著シキモノナリ愚ニ作フ(ナイトドレッス)ハ斯界ノ高評嘖々タリ子兒ヲ愛シ衛生ヲ重ンズル慈母ハ必ズ試用セラレンコトヲ希望ス
(一)ハ寢卷ハ寢冷ヲ防グノミナラズ海水着トシテ最モ輕便且ツ冬期ハ和作服ノ下着トシテ防寒具トナル一擧三得ノモノタ。

# 婦人用夏服地到着

## 實用新案登錄

第二三一一七號

男女兼用

## ナイトドレッス

(一名寢冷知ラズ)

NIGHT—DRESS.

| 號數＼種目 | キャリヤコ | イタリヤ | メリヤス | セル | 本ネル |
|---|---|---|---|---|---|
| 十四歳マデ一號 | 一、一〇円 | 一、三〇円 | 品切 | 二、九五円 | 三、四〇円 |
| 十二歳マデ二號 | 九〇 | 一、〇五 | 品切 | 二、三〇 | 二、八五 |
| 八歳マデ三號 | 八〇 | 九五 | 品切 | 二、三〇 | 二、三五 |
| 六歳マデ四號 | 七一 | 八〇 | 品切 | 二、一九 | 二、一五 |
| 四歳マデ九號 | 六五 | 七五 | 品切 | 二、〇〇 | 一、九〇 |
| 大人特一號 | 一、六〇 | 一、七〇 | 品切 | | |
| 仝特二號 | 一、四〇 | 一、五〇 | 品切 | | |

御注文ニヨリ調製仕候

送料　内地八錢　臺灣滿洲朝鮮樺太三十錢

(特約販賣店)

三越、白木屋、新橋關口、
報知社代理部、
上野松坂屋呉服店、
九段下久保濱商店、
名古屋いとう呉服店、
名古屋桔梗屋呉服店、
福岡渡邊洋服店、
奈良松野屋呉服店、

婦人洋服地類及附屬品
並ニ裁縫一式

製造元　大河内婦人洋服店

東京市本郷區砂町大通り
電話下谷五二一八
振替東京八三七二

制

[illegible]

# 羽二重

□營業品目□

■平羽二重　■紋羽二重　■朱子羽二重
■大巾羽二重　■工藝用羽二重　■絽及絽縮緬
■その他色々

夏は絽
中元の御贈答には殊に適當にて候

一、弊店は總て自分の工場で出來ますのを直接に皆樣に御賣り致しますので他店よりは必ずお安かろうと存じます
一、羽二重類は如何なる品でも御座います又夏向は絽及絽縮緬も色々御座います御進物用品には桐箱入にて體裁善く致します
一、御紋附縫模樣等の御染物は熟練なる京都の染屋と契約が御座います最も入念に迅速に無手數にて調進致します
一、御注文の節には電話にて御申付け下さいますれば早速店員御伺ひ致します

東京市神田區西小川町一丁目十三番地
工場　福井縣吉田郡森田村

島田織物會社出張所
# 羽二重屋商店

電話本局三七八三番
振替東京一三七四八番

明治四十五年七月一日發行（毎月一回一日發行）第二卷
明治四十四年八月二十八日第三種郵便物認可　第二號

Digitized by Google
Original from UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER